２０１９年１２月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１８日（水）、ＮＨＫ大阪放送局において、８人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、「響きあう美　佐竹本三十六歌仙絵」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	篠　　雅廣	（大阪市立美術館　館長）
委　員	片山九郎右衛門	（公益社団法人京都観世会　会長）
	小林祐梨子	（スポーツコメンテーター）
	佐伯　順子	（同志社大学社会学部　教授）
	鈴木　元子	（杉本や編集処　編集者）
	添田　隆昭	（総本山金剛峯寺執行長・高野山真言宗宗務総長・高野山学園理事長）
	堀江　尚子	（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト代表理事）
	安井　良則	（大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼感染管理室室長）

（主な発言）

＜「響きあう美　佐竹本三十六歌仙絵」
（総合　１１月３日(日) 前 7:45～8:24 近畿ﾌﾞﾛｯｸ放送）について＞

○　ＮＨＫらしい、勉強になる番組だった。ナレーションは京都出身の俳優による関西弁によるものだったが、ぎこちなく感じた。番組では、作品ごとに歌仙の顔をクローズアップして丁寧な説明があったので、古典の世界が理解しやすかった。ただ、ほおが紅潮しているものに対する「恋の病に浮かされている」という解説は、別の解釈の可能性もあるのではと感じた。また、「茶の湯」の歴史から見ると、近代の財界人のステータスである「茶の湯」が、三十六歌仙絵の運命を決めたところがおもしろかった。そもそも美術品という概念が明治以降に作られたもので、本来は総合芸術としての「茶の湯」の中で見るものだったことがメッセージになっていて、とてもよかった。

○　最初はナレーションに違和感があったが、番組を何度も見ているうちに自然に思えてきた。表具店の仕事を初めて知ったが、古い作品を守るために今も続く仕事であることを子どもたちにも伝えていきたいと思った。高額な佐竹本三十六歌仙絵の作品を守るために、益田鈍翁が切断するという策を考案したことは、困難を乗り切る方法を考える点で、子どもたちの学びにつながると思った。

○　１０月２３日(水)の歴史秘話ヒストリア「幻の絵画　流転のドラマ　至高の美　佐竹本三十六歌仙絵」を先に見ていたので、初めて知る内容ばかりではなかった。鎌倉時代に描かれ、秋田の大名・佐竹家に伝わった絵巻物を、個人の裁量で大正時代に切断し、所有者がそれぞれ掛け軸にしたことは、今では信じられないことだ。４０億円となる絵巻物のままでは買い手がつかず、海外へ流出することを防ぐための苦肉の策だったということだが、国ではなく個人の力に頼らざるを得なかったことがより大きな問題だったと思う。切断されて大正時代の財界人の手に渡ることで、より多くの人々の目に触れるようになったことは事実だと思う。今後、作品の一部が海外に流出したり、散逸したりする可能性も感じた。ナレーションの「125 年続く京都の表具店に勤務する私」という設定は、佐竹本三十六歌仙絵の大事な要素である掛け軸を身近に感じるうえではよかったと思うが、関西弁がやや中途半端に感じた。

○　特別展を見に行かなかったことを残念に思うぐらい、興味深く、いろいろと勉強になる番組だった。大正期の財界人のお金の使い方や教養の深さはすばらしいと思った。絵巻物が切断されたことの是非はわからないが、作品が海外流出したり、散逸したりすることはなかったので、作品そのものを殺さなかったという意味ですばらしいと思った。興味深かったのは、掛け軸をかける場面や、廊下から持ってくる場面が随所にあったことで、近くで見ているような臨場感があった。また、番組のＢＧＭも、古いものを新しく感じさせる意図が感じられて、心地よかった。一つだけ気になったのが、ナレーションの関西弁がきつかったことで、関西出身ではない私には、一度聞くだけでは理解できない部分もあった。また、「私」が語る設定にしなくても、番組は十分成立していたように思う。

○　三十六歌仙絵の断簡を実物で見たことがあるので、とても興味深かった。今後このような８Ｋ制作のコンテンツが増えていくことを期待している。歌仙とは、三十六歌仙に由来することばだが、小野小町などの有名な歌人を紹介しながら、詳しく解説したらより身近に感じられるのではないかと思う。表具師のことも取り上げていたが、どういう表具がよいものかということや、上手な表具師が手がければ痛めずにまたは

がせることも紹介すれば、古くから伝わる保存技術に視聴者の興味が向くかと思う。ナレーションに違和感があったが、本来話すことのないものを擬人化して語らせるという演出でもよかったかと思う。また、大正時代は所蔵品の売り立てはたくさんあったので、売り立てになったものやその理由についても、番組のテーマになるのではないかと思う。番組では、絵巻を個人で所有することが不可能だから切断したと結論づけていたが、本当にそうだったのだろうか。大正時代であれば、ほかの方法もあったのではないかと思う。

○　ふだんインターネットで関心のある情報を探すが、これまでまったく知らない、新しい知識が得られたので、テレビはすばらしいメディアだと改めて思った。番組を見終わるころには一文字や中廻しの部分も高価で貴重でこだわりぬいたものだと感じられて、すばらしい番組だと思った。切断された理由は衝撃的だったが、今では大変美しい掛け軸に生まれ変わっている。益田氏の判断で、しかも購入者をくじ引きで決めたことは、当時は大きな事件だったのだろうか。また、今もすべての歌仙の掛け軸が日本に実在しているのだろうかと気になった。一番すばらしかったのは、女性歌人「小大君」の歌仙絵を復元していたところで、高い技術に感動した。

○　特別展で見た作品のことを思い出しながら番組を見た。以前、８Ｋ制作の映像で美術作品を見たときに、細かいところまで見られる技術のすばらしさを感じたが、この番組でも、肉眼ではわからない髪の毛の一本一本なども見ることができた。また、年を経るにつれ作品は劣化していくので、８Ｋ映像に残しておけば、100 年後の人たちがよい形で作品に接することができるのではないかと思う。作品を切断したといっているが、実際は一枚一枚はがしている。主人公が表具師という設定なので、絵はどのようにはがれるのかということも、紹介したらよかったと思う。大正時代の財界人たちは、美術品に対する愛着があり、目利きとしても秀でていたが、現在、彼らに代わってどんな人たちが美術品や芸術品を保管しているのだろうか。三十六歌仙絵が、100 年後も散逸せずに全部残るかは疑問に思うので、切断したことを歴史的に検証する必要があると思う。

○　番組では、掛け軸をかける場面が随所にあったが、かける技術にもよしあしがあるので、興味深いと感じた。1983 年に放送したＮＨＫ特集「絵巻切断～秘宝３６歌仙の流転～」とは、番組の切り口がだいぶ違ったと思うので、前回の番組の趣旨や差異化したところを知りたい。茶会は大正期がピークで、財界人にとって単なる文化的活動ではなく、密談が行われる場所だったと聞く。個人の所有者はたくさんいるが、たとえ重要文化財でもふだん使いをして楽しめるところは特権だと思う。文化財がどの

ように使われるか、鑑賞されるかということを番組で実例として見ることができて、おもしろかった。

○　京都国立博物館において、「佐竹本三十六歌仙絵と王朝の美」が開催され、それに合わせてＮＨＫで放送された３本の番組を視聴した。同じ三十六歌仙絵を題材にしながら、違う切り口で番組が作られそれぞれに楽しめた。「歴史秘話ヒストリア」では、益田氏が切断を決意し、くじ引きで購入者を決めたことや、鈍翁自身は坊主の絵を引き当てて機嫌が悪くなったことなど、100 年前にあっただろうことがドラマで再現され興味深かった。１１月１０日(日)の日曜美術館「幻の国宝　佐竹本三十六歌仙絵」は、歌と絵に焦点を当てた内容だった。男性歌人は同じように見えるが、よく見ると一人ひとり表情が違い、歌に合わせてとても細やかに描かれていることがわかった。日本画家の千住博氏や歌人の馬場あきこ氏の解説でより奥深い内容になっていたと思う。そして、今回視聴した番組では、表具師の店に勤めている女性から見た歌仙絵という設定で、単なる歌仙絵ではなく、表装も含めた一つの芸術品としての視点から解説されていた。ナレーションが京都出身の俳優だったので、イントネーションは自然だったと思う。切断されなければ国宝となっていたかもしれないが、切断されたことで一枚一枚当時の文化人の手によってぜいたくに表装され、海外に流出することなく現代まで引き継がれてきたのだということがよくわかった。博物館に見に行ったが、もし番組を見ないで行っていたら、とても絵が小さいので、細かい表情まではわからず、表装のすばらしさもよくわからずに帰ってきただろう。番組で予習しておいて本当によかったと思った。

○　興味深い番組で、まるで映画のようなドラマチックなストーリーだと思った。数百年という時を経て受け継がれてきた絵巻物が時代の流れに呑み込まれ、経済社会の枠組みに取り込まれていくことになり、美術作品が売買対象物となったこと。それ故に持ち主が変わることになったこと。しかし、それを維持することが難しくなり手放すことになったこと。そこで一計を案じた財界人が分割所有という方法を考え出し、バラバラに切断して掛け軸として所有するに至ったことなどが丁寧にわかりやすく説明されていたので、この史実を知らなかった私は番組に引き込まれた。そしてそれらのかけらの一つ一つが今もさまざまな場所で輝きを放ちながら存在している。益田氏が行なったことは快挙なのか、暴挙なのか、立場によって意見が分かれるだろうが、益田氏のクリエイティビティーとビジネスセンスに感銘を受けた。もし、この絵巻物が今も完全な姿で残っていたとしたら、この番組はなかったことだろうし、多くの人々が知る作品となっていなかったかもしれない。そういう意味では益田氏はアーティストだったのかもしれない。ナレーションの関西弁も新鮮だった。

○　三十六歌仙絵については、「歴史秘話ヒストリア」でも「日曜美術館」でも見ていたので、どこが違うのかと言う視点で見た。まず表具師が主人公のようなしつらえで、表装の工程が紹介されていたことから、伝統工芸への関心が高まったのではないかと思う。次に各作品の所蔵美術館が紹介されていたことが、京都国立博物館での特別展に足を運べなかった私に、各作品を見て歩く次の楽しみにつないでくれた。作品の所有者の紹介もほかの番組にはなかったと思うが、当時の映像が大変興味深かった。富の偏在こそが美術・芸術を守ってきた事を実感した。最後に、ナレーターの関西弁が不自然で残念だった。

（ＮＨＫ側）

この秋最大の話題の展覧会の一つということで、三十六歌仙絵を、この番組に加え、「歴史秘話ヒストリア」「日曜美術館」とさまざまな番組で取り上げた。また、この番組は、８Ｋ版も制作し、ＢＳ８Ｋで１０月２７日(日) 後7:00～7:49 に放送した。毎回少し視点を変えて演出が異なるものを提供したいという思いがあって工夫をした。ナレーションについても、議論や検討を重ねたうえで、このような演出をしたが、制作現場でさらに議論もして今後の番組につなげていきたいと思う。

（ＮＨＫ側）

佐竹本三十六歌仙絵は知る人ぞ知る名品だが、広く一般には知らない方も多いと思うので、番組の演出はかなり工夫した。この番組は、視聴者になじみのない「表具」をメインに置いているので、美術番組の解説のようなナレーションではなく、「表具店に勤める私」が語る演出とした。ナレーターも、京ことばで話せる俳優にお願いしたが、完全な京ことばだと、全国の視聴者にはわかりにくいので、共通語とバランスをとった。共通語で書いたナレーションを、京ことば指導をする専門家に直してもらい、ナレーションの収録当日も立ち会っていただいた。違和感を覚えた方もいたようなので、指摘は今後の参考にしたい。この番組は、表具と絵が一体になった新たな美術品が誕生したという視点で描いており、「断簡」という手法で文化財を保護することの是非については、省略した。「歴史秘話ヒストリア」では実際に絵をはがすところを紹介したが、絵巻物は一つの大きな紙に描かれているのではなく、絵を一枚一枚張りつけているので、分割しやすい形式だ。４０億円もする絵巻だったため、大きなニュースとして取り上げられた。一方、ＮＨＫ特集「絵巻切断～秘宝３６歌仙の流転～」は、文化財保護の視点と、ドラマチックに

所有者が流転していく話をドキュメンタリーとして追った番組だった。文化財保護の視点で問題提起しており、現在の文化財保護の観点からはあり得ないことだが、文化財として残ってよかったという視点で描いている。

＜放送番組一般について＞

○　１１月１８日(月)の小さな旅「木を伐（き）る民～奈良県　吉野～」を見た。樹齢100年以上の木を切っていたが、そこに至るまで草取りや枝打ちなど大変な労力の積み重ねがある。この番組では木を切るというハイライトを撮影しているが、木が育つまでの大変さも今後取り上げてほしい。

○　番組に登場している全員が、命に感謝し、木の存在をわが子のような思いで切ったり加工したりしていて、共生社会を感じさせる番組だった。「木の伐採は角度がすべて」と聞くが、番組でも実感した。また、高さ５０メートルの木を切ることは、体力的にも厳しいと思うが、命あるものを切るという意味でかなり神経を使う仕事だと思った。おけ作り歴７０年の松谷一二三さんの職人技は、映像から十分過ぎるぐらい伝わってきた。後継者がいないのかと思うと寂しい気持ちもあるが、のり付けがごはんという変わらない匠の技にも感激した。一つ気になったのは番組のテーマ曲で、サスペンスドラマが始まるような曲調は内容とのギャップを感じた。また、映像から吉野杉がきれいな年輪を持つことはわかるが、吉野の木の特徴も知りたかった。

○　木々の間に木を倒す技術が保存されていることや、木の使用目的にたどり着くまでのいろいろなドラマが描かれていて、よい番組だと思った。度重なる台風で山が荒れているが、農林業や山を維持していくことの大切さを感じた。テレビを通じて、日本で衰退している林業、職人などの大切さをもっと伝えてほしいと思った。吉野杉は一本一本価格がつくような銘木だが、竹に至っては竹やぶの所有者や権利関係がわからず、採取できなくなってきていると聞く。製品に至るまでのよい素材を残していくために、こうした問題にクローズアップして、解決法を導き出せるような番組も制作してほしい。

○　制作者の優しい視線が感じられる、とてもいい番組だった。「小さな旅」のテーマ曲を聞くと、郷愁の思いにかられる。ひなびた山間地で木を糧に暮らす人を描いていて、穏やかな気持ちで見ることができた。出演した方々は、自分からは取り立てて思いを主張せず、聞かれたら淡々と話しているところに、人々の清らかさや美しさを感

じた。個人的には「やまいき」の生活をもう少し知りたかったが、これ以上踏み込むとドキュメンタリーになってしまうので、番組のコンセプトを考えるとちょうどいい描き方だったと思う。ただ気になったのは「吉野とはどの地域を示すか」ということだ。地域に詳しい人であれば、タイトルや冒頭の地図を見ればわかるが、吉野は広範囲を指すので、番組冒頭で吉野の説明や地名のテロップがあればわかりやすかったと思う。

○　この地域では 400 年以上も前から人々は木を切る仕事に従事し、木を切った後には、植林して山を管理し、樹齢 200 有余年に至るまで何代にもわたって木を育て上げてきたことに感心した。５０メートルの高さの杉やひのきを切り倒すときには木と木の間のわずかな隙間に計算しながら倒していく職人の仕事をおもしろいと感じた。また、毎日山に分け入って急斜面を行き来し、間伐や伐採などの作業を行うのは、厳しく、時には命に関わる仕事だが、江戸時代から「やまいき」の人たちが引き継いできた木を、自分が切ることを光栄に思い、仕事に誇りを持っていることも伝わってきた。また、ただ一人になった８６歳のおけ職人の松谷さんの仕事は、まさに神業だと驚かされた。昔はたくさんあったおけ屋も松谷さんの店１軒だけになり、将来的におけ作りの技はどうなってしまうのかと思った。吉野杉を使った樽やおけを作る職人の育成と、技の継承に期待したい。

○　この番組を見て、とてもぜいたくな２５分だったと感動した。ふだんインターネットで動画ばかり見ているが、大きな木が倒れたときや縄を引っかけたときの音を聞き、テレビの音はこれほどよかったのかと改めて思った。一方で、危険な「やまいき」の仕事に同行する山田敦子アナウンサーが、ヘルメットは着用しているものの、軽装であることが気になった。最近のトレンドのＳＤＧｓを理解できずにいた私だが、中平武さんが木の年輪を見せながら「200 年前の人たちの思いを受け継いで、最後に木を切らせてもらっている」と語る場面で、昔の人たちが木や水や土地を守ってくれたおかげで今があると痛感した。おけ作り職人の後継者がいないことを残念に思い、私自身が生活の中で何ができるのかとあらためて考えさせられた。

○　木に焦点を当てた番組で、自然と人間との関わりを考えさせられる番組だった。歴史学者が執筆した「木の観点から日本の中世史を見る」という趣旨の本があるが、日本の木はどこで生産し、誰が使っていたのかを考えながら日本史を語る歴史番組もできるのではないかと思った。木の利用は政治権力にもつながるので、政治史と関連して、おもしろい番組が制作できるのではないか。

○　この番組は、紀行番組で、林業の衰退期の危機的な状況を訴える番組ではないが、産業構造が変わりつつあることを感じさせられた。チェーンソーの導入時期に、モーターの激しい振動が原因で白蝋病が社会問題になったことがあるが、今はどうなのか。また、吉野はかなり広い地域を指す名称なので、さらに説明や、場面転換する中で取材している場所をもう少し大きい地図で示していれば、わかりやすかったと思う。

○　「小さな旅」は、休みの日に何となく見ている番組で、耳慣れたオープニングの曲は昔から変わらず、ホッとする番組だ。今回は奈良県の吉野ということで、江戸時代に植えられた杉やひのきを切る「やまいき」の男たちの物語だった。手入れされ整然と並んだ木から 1 本を選んで切るその技がすばらしく、素直に「カッコいい」と思った。当たり前だが、野菜などと違って、木は植えてすぐに成長するわけではない。200 年や 300 年前に植林された木が令和の時代になってようやく材木として市場に出るようになる。江戸時代に植林した人たちの思いを感じながら、幸運にも何百年に一度のことに巡り合えてその木を切ることができるという思いを持っていることに感動した。海外の安い材木に押されて日本の林業は衰退気味で、荒れた山林も多いという話を聞いている。最後の一人となってしまったおけ職人もそうだが、伝統技術を受け継ぐ人が出てきてほしいと感じた。こういった身近でありながら実は気づいていない風土や暮らしを、押しつけがましくなく静かに伝えてくれる番組はあまりないように思う。地味ではあるが、このスタンスでずっと続けてもらいたい番組だ。

○　すばらしい番組だったので、これまで一度も行ったことのない吉野を訪れたくなった。古来より日本の文化を支えてきた林業の循環システムの奥深さに改めて感服した。200 年前の人たちからの贈り物である木をいただき、200 年後の人たちのために植林する。その時間軸の壮大さに心をわしづかみにされた。木を伐採するシーンが何度か登場するが、「やまいき」のリーダー的存在だという中平さんが、見事に狙った方向に木を切り倒す様も圧巻だった。日本で最も古くから林業が行われたという吉野には、切り出した木を製材する仕事や木を樽などに加工する仕事などが存在し、ひとつの木材クラスターが形成されている点にも興味を持った。全員が自分の仕事に誇りと愛着を持っているということが番組を通じて伝わってきた。人々が古からの学びを受け継ぎ、その技を次世代に伝承しながら、懸命に生きてきたのだと思う。日本各地に点在する伝統産業は対象となる事物は異なっても、吉野と同様の物語が繰り広げられてきたのだろう。しかし、私たちは、ここ何十年かの間に、その美しいエコシステムを壊してしまった。そのことを改めて気付く貴重なきっかけをもらった。こういうドキュメンタリーもよいと思った。

○　「小さな旅」はいつから続いているのか。冒頭でどこか懐かしいメロディー、「木を伐る民」のタイトル、映像、すべてが昭和の時代に視聴者を誘ってくれるような作りだ。番組全体に流れる山田アナウンサーの朗読も心を癒すものだった。番組の中では、100 年前に植えられ、育てられ、伐採され、また生かされていく銘木の吉野杉に、悠久の時の流れを感じさせられた。主人公の１人、中平さんの「やまいき」としての仕事、家族、人生がよく描かれていた。「木と寄り添うことを実感していたい」ということばが印象的だった。もう１人の主人公、松谷さんの職人芸や、吉野の里で生きる職人人生も、都会に住む私たちに、別の人生があることを示してくれた。その中で、職人は「今は松谷さん １ 人」と言うナレーションは何を視聴者に問いかけているのか。中平さんや松谷さんのように森や木と生きている人生があれば、吉野には水と共に生きている人たちもいる。日本の国土計画がコンパクトシティー化を目指す中で、登場人物のように山や水と暮らす人たちを、どう守っていくのかは貴重な課題だ。最後に誰もいなくなった後で１人木を削る松谷さんの姿が印象的であった。

（ＮＨＫ側）

「小さな旅」は 1983 年に首都圏向けとして始まった番組で、全国放送されるようになった今も、変わらない音楽、ほぼ同じ番組スタイルの紀行ドキュメンタリーだ。今回の番組は、奈良局のチームで制作した。吉野が奈良の人にとって大きな意味を持ち、日本の産業や文化や教育に大きな影響を与えたということも考えながら見ていただくとより味わいがあるように思う。また、奈良県の話題は南部に比べて北部が多くなりがちだが、吉野の話題は、南部の視聴者にもよく見てもらえたので、奈良局にとって大きな意味を持つ番組だった。

（ＮＨＫ側）

吉野という地域に関しては明確な区分があまりなく、「やまいき」の方々が山を広く行き来することもあり、最初の地図で吉野を紹介する際、境界線も含めてあいまいな表現を取っている。チェーンソーの振動の問題は、厳密に作業時間の管理などを行うことで、対策しているとのことだ。「小さな旅」は歴史ある番組で、旅番組のテイストとドキュメンタリーの線引きが難しいものの、制作するうえで、そこに暮らす人々の顔がよく見えるという意味で楽しいところもある番組だ。

○　１１月２０日(水)の歴史秘話ヒストリア「そして“能”は生まれた　世阿弥　時代を超える戦略」を見た。監修者がいたのかもしれないが、時代考証がやや不十分ではないかと思った。勧進能の絵図面を見て、舞台の後ろに橋がかりをつけるなど、世阿弥の時代の演能シーンを考証しているが、そもそも絵図面自体が大名の名前が並んでいるもので、名前を書くために便宜的に書かれたともいわれているので、そういう形に必ずしもなっているかはわからない。また、当時はたびを履いていなかったはずだが、再現ドラマでは現代の装束と履き物で、ばらばらの時代のものだった。それならば、現代のもので統一したほうが違和感はないと思う。また、室町時代初頭の京都の資料が残っている間に、室町時代の文化をもう少し真剣に扱い、「大河ドラマ」でも取り上げてほしいと思う。シェイクスピアより 150 年ほど前に、戯曲の構成、演技の伝承、口承口伝に関して体系的にまとめているのは世界的に見ても「風姿花伝」のほかにはないと思うので、国外にもしっかり発信してほしい。

○　「体感　首都直下地震ウイーク」で、１２月２日(月)～５日(木)の「ＮＨＫスペシャル　シリーズ　体感　首都直下地震」（総合　１２月２日(月）後 7:30～8:42，３日(火）～５日(木)後 10:00～11:00）を見た。「ドラマ　パラレル東京」では、首都直下地震が発災した４日間を描いており、本当に感心した。ドラマと連動するグループチャットにＳＮＳで参加していたが、このようなテレビの活用のしかたがあるのかと感じた。このように巻き込まれると、さらに内容を本当に理解できることがわかった。地元の同世代の多くが公式ＳＮＳに登録していて、同じ時間にアンケートなどが配信されるので、皆でそれを話題にした。番組もすばらしかったし、ＳＮＳで「エレベーターに閉じ込められたらどうする？」など質問がたくさん配信されて、視聴者に参加させるなど、視聴者の巻き込み方がすごいと感じた。スマートフォンを持つ中高生もＳＮＳに真剣に参加しており、「タイムシフトで見るのではなく、グループチャットに登録してリアルタイムで参加することに意味がある」と話していた。中高生が参加していることが重要だと思った。

○　大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～」は、最後まで本当におもしろかった。異なる時代と空間を激しく行き来してわかりにくいという意見もあったが、１２月１５日(日)の最終回「時間よ止まれ」で「志ん生の富久は絶品」の伏線が回収され、「ドラマ芸術がここに極まった」というぐらいの感動を覚えた。それぞれの俳優の演技はすばらしく、最後のシーンで古今亭志ん生を演じるビートたけしさんの笑顔にぐっときた。次の大河ドラマも楽しみにしている。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局

２０１９年１１月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２０日（水）、ＮＨＫ大阪放送局において、８人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、クローズアップ現代＋「追跡　関西電力・金品受領の裏で何が？」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	篠　　雅廣	（大阪市立美術館　館長）
副委員長	帯野久美子	（関西経済同友会　常任幹事）
委　員	片山九郎右衛門	（公益社団法人京都観世会　会長）
	小林祐梨子	（スポーツコメンテーター）
	鈴木　元子	（杉本や編集処　編集者）
	添田　隆昭	（総本山金剛峯寺執行長・高野山真言宗宗務総長・高野山学園理事長）
	矢崎　和彦	（(株)フェリシモ　代表取締役社長）
	安井　良則	（大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼感染管理室室長）

（主な発言）

＜クローズアップ現代＋「追跡　関西電力・金品受領の裏で何が？」
（総合　１０月２３日(水)放送）について＞

○　関西電力の金品受領のニュースは衝撃的だった。事実が明るみになってから、各種メディアの報道で表面的には知っていたが、この番組を見てよく理解できた。短期間に 100 人以上の関係者を取材し、あまりニュースを知らない人にもわかりやすく伝えられるＮＨＫの制作力を感じた。こうしたできごとは、関西電力以外でも起きうる話なので、高浜町と関西電力の持ちつ持たれつの関係性を世間に明るみに出してもらってよかったと思う。

○　関西電力はほかの電力会社より原発の依存度が高く、保有する原発のすべてが福井

県の若狭地方にあるのはなぜかと思っていたが、今回の問題の発覚でその理由の一端が見えたように思う。関西電力から地元に落ちていった協力金や施設の建設費用などのばく大なお金の流れに福井県高浜町の元助役が絡んでいて、元助役とその周辺の建設会社に多額の金が入り、そこから還流する形で金品が関西電力幹部に流れていたことがわかった。お金や権限を元助役に集中させておくことが、関西電力や地元の建設会社にとって都合がよかったのだろうと思った。原子力発電には、施設建設費用に加え、地元の賛成を得るために多額の費用が必要であり、電力会社のみならず国からの税金が投入されている。それでも原子力発電は必要なのだろうか、福井県の高浜以外の美浜、大飯原発は同じようなことはなかったのか、ほかの地域の原発でも大なり小なり似たようなことはあったのではと感じた。

○　短期間に 100 人以上の関係者に取材し、金品受領の流れなど過去までさかのぼり、コンパクトにわかりやすく、理路整然とまとめられていると感じた。まさに時宜を得た番組だが、今も取材を重ねていると思うので、次の機会にはほかの地域の状況も知りたいと思う。印象深かったのは番組冒頭の「大企業のその会見はにわかには信じがたい内容だった」というコメントで、ほかのことをしていても手をとめたくなるような始まり方だった。国民の感情を本当に表していると感じた。1984 年の高浜町のアーカイブス映像も非常にインパクトがあり、当時の空気感が凝縮されていた。体育館が建設され、町が整備され、「原子力から未来が開ける」という歌詞の音頭が流れる映像だったが、関西電力と町の癒着した関係が築かれる中、いい暮らしと引き換えに原発を建設した町の悲しみを感じた。番組の中では議会関係者の話が多かったが、地元の方の思いも知りたいと思った。

○　コンパクトでわかりやすい番組だった。これまで福井県が原発を引き受けてくれているおかげで安全で安価な電力を享受していると思い込んでいたが、それ自体、事実かどうかわからないと感じた。東日本大震災以降、リスクは広範囲に及ぶことがわかってきているので、原発はどの程度必要だったのか、あらためて検証する番組を制作してほしい。番組後半で、上納金の存在や、元助役の地位が確立していった状況がよくわかった。東日本大震災以降、5,400 億円の安全対策費用が生まれたときに、関西電力と元助役の持ちつ持たれつの関係で、金と物事が動いていき、国民の安全が軽視されていたように思えて、腹立たしく感じた。一方で、地元に事業を誘致して受注することに悪いイメージがつかないよう、ナレーションなどで配慮してほしいと思った。公共事業の入札のときに、地元の企業を外すことが前提になると、地元は困った事態になると思う。

○　番組を通して、４０年間にわたる関西電力と高浜町の信じがたい関係がわかりやすく伝わってきた。100 人以上への独自取材を行った、ＮＨＫの取材力にも驚いた。人口１万人ほどの町で、原発で 2,000 人以上が働いている高浜町は、原発のおかげで町が整備されたともいえると思うので、地元の人たちの声も聞きたかった。元助役が町長をしのぐ力を持っていたということなので、助役という役職の説明があれば、もう少しわかりやすかったと思う。国からの交付金は一基あたり４０年間で 1,300 億円ということなので、関西電力と高浜町の関係だけでなく、国も含めた三者の関係性も知りたかったと思う。また、しっかりとした原因解明は難しいかもしれないが、今後の再発防止策も知りたかった。

○　原発に限らず、自衛隊の施設や焼却炉など、いわゆる“迷惑施設”を建設するときに、地元で反対がある中、元助役のような存在に便利に頼ってしまう面はある。社会全体を見渡してみると、巨大組織のトップの人たちが、たたき上げで身を立ててきた人物の勢いに負けてしまうこともあるかと思う。ほかの電力会社に比べて、関西電力は原発に依存する割合が高い理由についても、もう少し知りたかった。

○　関西電力の金品受領の事実に多くの人が驚いたと思う。２０年以上前であればありそうな話だが、今の常識では考えられない。これが断ち切れなかったところが関西電力の弱さだと思う。短期間に 100 人以上に取材しても新しい事実は出てこなかったのかもしれないが、もう少し踏み込んだ内容がほしかった。関西電力の役員が金品を受領したままにしていたことは不可解な点が多く、第三者委員会の報告を待ちたいと思う。報告で開示されない情報もあるかもしれないが、ＮＨＫには深掘りして伝えてほしい。この問題は個人の責任なのか、会社組織としてどの程度問われる責任なのかは社会全体で共有すべきだと思うが、地元企業に矛先を向けすぎないほうがいいのではないか。

○　原発の建設を選択した町は、選択しなかった町と比べて、立派な施設や道路があり、地域格差が生まれている。今回問題となっているのは、金品の受領額があまりに大きすぎて社会的儀礼の範囲を超えていることもあると思う。短期間でよく取材してまとめた番組だと思うが、この問題の根底にあるのは地方の悲哀で、それを金品で解決しようとする方法はどうなのか、もう一度時間を置いて検証してほしい。また、金品の授受の原資は電力料金であろう。今後、取材を進めていったときに、どこの電力会社も同様のことを行っているとしたら、日本のエネルギー政策などにも言及することになるだろう。公共放送として、どのような伝え方をするかが難しいと感じた。

○　関西電力と元助役との癒着については大きく報道されていたので概要は分かっていたが、番組を視聴して、何年も前からここまで密接なかかわりを持っていたのかという思いがした。菓子折りの底に金貨が仕込まれているとは、時代劇を見る思いだ。こうしたことが何年もの間、当たり前のように行われ、今まで表沙汰にならなかったことが不思議だ。元助役が亡くなっていなければ、この問題はまだ表には出ていなかったのだろう。原発を作るには地元の理解が必要だが、反対意見を抑え込むために巨額のお金が動いていること、一部は個人の私腹を肥やすために使われていること、そしてその原資は私たちが支払っている電気料金であるということに強い憤りを感じた。日本は資源が乏しく、発電するには原子力に頼らざる得ないところがある。東日本大震災の後、原発が停止し、節電の意識が高まったが、今はそれも少しトーンダウンしているように思う。原発稼働に反対するだけでなく、私たち国民が電気を垂れ流すような生活を改める必要があるのではないかと感じた。今回の問題では、100 人以上から聞き取り調査をしたということだが、放送時間が短くてそのすべては伝えられていないように思う。もう少し時間が長い番組でもよかったのではないだろうか。第三者委員会を立ち上げて調査中とのことなので、今後はその結果を特集してほしいと思う。また、番組を見ていて、これは関西電力だけの問題なのだろうかと感じた。原発を一基作ると、その町には 1,300 億円という大金が国から交付されるということだが、ほかの電力会社やほかの原発がある地域で、同様のことがないのか、適正に交付金が利用されているのかなども報道してほしい。

○　関西電力や福井県などを対象に、関西の地の利を得た緻密な関係者への取材により、原発関連の大きな問題点を明らかにした極めて意義深い番組であった。福井放送局の記者、識者の意見も含めて、大変わかりやすかった。３０分という時間の中ですべてを語りつくすことは難しいかと思うが、地元の方がどのような意見を持っているのか気になった。元助役のように、通常は表に出ないが、実は組織を裏で動かして悪事を働くキーパーソンはどの組織、業界にもいると思うので、そうした組織の闇に具体的、実証的に迫る内容という意味でも有意義であった。欲を言えば、再発防止のためにはどうすればよいのかについても、より多くの提言があると今後の参考になるかと思った。福井県は北陸三県のひとつとして、男女共同参画の度合いも高く、幸福度も高いとの調査結果があったと思うが、そうした生活実態と、原発の問題がどう関わっているのか、さらに議論の余地があるかもしれない。

（ＮＨＫ側）

この問題は９月２７日(金)の朝に一斉に報じられたが、関西の基盤を形成する企業の大きな問題なので、一週間後の１０月４日(金)にかんさい熱視線

「疑惑の３億円～関西電力　金品受領問題～」を放送した。多額の金品を渡していた元助役とは何者かということを中心に伝えたが、さらにどうしてこうした問題が起きたのかを伝えようと、この番組を制作した。関西電力のほとんどの関係者は口が重く、カメラの前で話したのが元会長１人という状況だったが、長年にわたる関西電力と元助役との関係性や、関西電力が東日本大震災の事故や美浜原発事故で世の中の強い批判を受けたことをきっかけにその関係が強まったことを明らかにできたと思う。さらに今、第三者委員会が実態調査しており、その報告をもとに、われわれの取材でどこまで明らかにできるかが、最大の課題になると思う。国民の怒りの原点は電気料金が原資となって行われたことにあり、その背景に原発の安全性に対する不安もあると思うが、指摘のとおり、原発の是非とは切り離して、政策としてどうなっているのかを見ていく必要があると考えている。関西電力の現状が、今後の関西の経済に与える影響なども含めて取材を続けていきたいと思う。

（ＮＨＫ側）

「もう少し踏み込んだ取材が欲しかった」という指摘を重く受けとめ、次回は「ＮＨＫだからこそ伝えられた」と思ってもらえるよう、取材していきたい。取材に応じてくださる関係者が少ない中、地道に取材を重ねて、公共放送として事実をもとに番組を制作した。関西電力は 1970 年の万博で初めて「原子の灯」がともったときに電力を送った会社で、原発の依存度が非常に高いという経緯がある。そうしたことをふまえて、美浜原発の事故や東日本大震災の原発事故をきっかけに、地元対策に傾注していったという視点から伝えた。取材に応じた地元の方は少なく、裏が取れた事実も少なかったが、地元の方の声を十分に伝えることができなかったという指摘は真摯（しんし）に受け止めたい。また、「地元の業者へ事業を運んでいくことが悪いことと受け取られかねない」という指摘については、しっかりと事業を行っている会社と、不透明な中で事業を行っていた会社は切り分けて伝えるように心がけたが、なお一層気をつけたい。また、「助役」という役職は、現在無いので、「現在の副町長に当たる」と補足説明してもよかったと思う。再発防止については、これから第三者委員会で事実関係が明らかになっていくが、この金品授受が、贈収賄や背任など違法性のある行為かどうかは非常に難しい問題だ。さらに、お金の流れもしっかり取材したうえで再発防止の提言もしていきたい。これから第三者委員会の調査報告もあり、人々の関心の高いテーマだと思うので、継続して取材をしていきたい。

○　敦賀や美浜の原発の建物を見れば、原発を誘致したら町の建物（特に公共施設）が他と比べて立派になるというのは、子どもが見てもわかるほどで数十年の持ちつ持たれつの関係はしかたないのだろうとも思ってしまう。普通に考えれば日本の都道府県や市区町村の幹部が電力会社に金品を押し付ける必要は全くないが、元助役の就任当時までさかのぼって事件の背景を取材していたので、なぜ電力会社幹部が次々と金品を受け取っていたのか非常にわかりやすかった。選挙出馬断念のメモや、田中元町長や議員への取材など踏み込んだ内容で、オイルショック以降日本が原子力発電へと舵を切り、事故が起こるたびに、元助役が経営層との関係を深めて関西電力を支配していくプロセスがよくわかった。原発をやめられないのならせめて、安全性を高めるためにお金は使ってほしい。第三者機関での調査がしっかり行われるよう祈ることしかできないのが残念だが、ＮＨＫには引き続き追いかけてほしいと思う。

＜放送番組一般について＞

○　１０月２９日(火)の「第１９回わが心の大阪メロディー」(総合 後 7:30～8:42)を見た。司会を務めた上沼恵美子さんは、大阪のコテコテのイメージの代表で、テレビに出ていると楽しんで見ている。一方で、テレビに出ている関西の芸人の「がさつさ」が大阪らしさと勘違いさせているように思えるので、「大阪」の発信のしかたを考えてほしいと思った。

○　今回の司会は上沼さんなので、生放送で何をしゃべるのかとハラハラしながら楽しんで見ていたが、陣内智則さんとの掛け合いもおもしろかった。トップバッターの上沼さんから盛り上がり、紅白歌合戦のミニバージョンのような感じで、知っている曲が流れたら見たくなるような番組だと思った。１５組のアーティストが出演し、連続テレビ小説「スカーレット」の主題歌も登場し、いろいろな世代が楽しめると感じた。視聴者から寄せられたリクエスト曲は、大阪、関西が詰まった曲だったほか、「スカーレット」特集では、関西にゆかりのある出演者たちばかりでドラマの裏話などもおもしろく、番組にはいろいろな要素が詰まっていた。大阪のテーマパークでＤＡ Ｐ ＵＭＰが歌う演出はよかったが、お笑い芸人が中継する演出は必要ないように感じた。西川貴教さんの道頓堀からの中継はとても楽しかった。１曲歌うためにあれだけの大掛かりな演出はすごいと思った。

○　楽しい番組だった。「ええじゃないか」のイントネーションが大阪弁より東京弁に聞こえてしまったのが少し気になった。連続テレビ小説の宣伝が少し長く感じたが、Ｓｕｐｅｒｆｌｙのすばらしい歌で雰囲気が変わった。歌への思いや、主人公の戸田

恵梨香さんへのエールやインタビュー、歌もとてもよく、心を打たれた。ドラマでいつも聞いているはずだが、特に「雨雲たちに　少しおびえている　炎の声よ　聞かせてくれる？」という歌詞はとてもよかった。「スカーレット」の窯をイメージしているようなセットも、ボーカルの越智志帆さんの炎のような衣装もよく、炎が踊りながら歌っているように感じた。アリスはあまり知らない曲を歌っていたので少し残念だった。

○　本当に楽しい番組だった。まさに紅白のようで、最初から最後まで楽しめた。世代的に出演アーティストは半分程度しか知らなかったが、オープニングで上沼さんの後ろにアリスが見えたので、楽しみになった。一方、気になったのは文字情報が多すぎることだ。小さいテレビで見ていたら文字が読めないと思うので、そこまで説明を入れる必要があるのかと思った。この番組に限らず、今はテレビ全体で説明が多すぎて、視聴者に親切過ぎる気がする。もちろん、文字があることでより効果を発揮する映像もあるし、障害のある方にとってはあったほうがいいこともわかるが、何が必要で何が不要なのか、画面のデザインとしてもう一回見直してもいいと思う。

○　今回６年ぶりに司会に復帰した上沼さんの存在感は圧倒的だった。連続テレビ小説「スカーレット」の特集では、戸田さんなど出演者の紹介や、Ｓｕｐｅｒｆｌｙが主題歌を歌う姿が初めて見られてよかった。アリスのメドレーは懐かしく、３人の元気なパフォーマンスがよかった。川中美幸さんと「二輪草」を歌った、辰巳ゆうとさんと大江裕さんは対照的で印象に残った。西川貴教さんの「雨の御堂筋」では歌唱力の高さを再認識したが、その後の道頓堀でのパフォーマンスにも驚いた。ＮＨＫ大阪ホールで歌ったあとに移動して間に合ったことと、若者がたびたび飛び降りて物議を醸している道頓堀川での過激なパフォーマンスをＮＨＫが企画したことに驚いた。締めの天童よしみさんの歌唱力は圧倒的で、最後にふさわしいと思った。

○　楽しい番組だったので、ＮＨＫ大阪ホールで実際に見てみたいと思った。この番組は全国放送だが、大阪の人が見る場合と、大阪以外の関西の人が見る場合、全国の人が見る場合と見方が少しずつ違っていると思う。大阪以外に住む私は、関西には京都も神戸も奈良もあるのにと感じてしまったので、次回以降取り上げてもらえるとうれしいと思う。ふだん歌番組は見ないが、昔聞いていたアリスの演奏と、Ｓｕｐｅｒｆｌｙの「フレア」はとてもよかったと思う。

○　ふだん歌番組は見ないが、冒頭の上沼さんの歌が上手で驚いた。全体としては、さまざまな大阪を紹介していておもしろかった。ごちゃごちゃと混在しているところが

大阪の魅力だと思うが、テーマパークからの中継は新鮮だったと思う。また、「世界の国からこんにちは」「冬の稲妻」と、年代を追って大阪を振り返ることができてよかった。道頓堀ジャックには本当に驚いたが、豪華絢爛な演出に圧倒され、番組がとても短く感じられたと思う。一方で、「スカーレット」は人気が十分あるし、出演者も大変だと思うので、宣伝は必要ないかと思う。また、ＮＨＫが作る大阪らしい歌番組としてどういう点を意識して制作したかを知りたいと思った。一般的に、バラエティー番組で見られる大阪らしさによって、東京の人からは関西弁は乱暴なことばのように認識されているように感じるので、別の大阪らしさも伝えてほしい。

○　新聞で上沼さんが自分の一代記を連載していて、その中で「天童さんには負けたくない」と頑張ってきたことが書かれていたので、この番組を興味深く見た。ただ、内容が盛りだくさんだったので、「元気をもらった」「楽しかった」という人もいるかもしれないが、私自身には疲れるものだった。生中継の時間内にさまざまなメニューを盛り込む意図があったかもしれないが、引き算して見せる演出もあったかと思う。また、テーマパークから中継をしていた芸人の１人が、ジャケットのインナーのシャツを外に出して着ていたので、少しだらしない印象を受けた。また、大阪といえば文楽と歌舞伎の本場で、1920 年代以降形成された「阪神間文化」もある。６年後に大阪万博があるので、別の視点からエンターテインメントとして大阪を紹介してほしいと思う。

○　「わが心の大阪メロディー」は第１９回ということだが、今回初めて視聴した。番組のタイトルから演歌だけの番組と思っていて見ていなかったのだが、若い世代の曲もあり少し意外だった。幅広い世代に見てもらえるのがよいのか、どちらかというと年配の人向けの内容に特化したほうがよいのか、意見は分かれるところだと思う。司会は大阪のおばちゃんを代表する上沼さんで、にぎやかな感じはするが、嫌いではない。派手なパフォーマンスや道頓堀、テーマパークからの中継などのてんこ盛り感、ガチャガチャ感があったが、これが大阪なのかもしれない。意外に楽しめたというのが感想だ。個人的には「スカーレット」の主題歌をフルコーラスで聞けたことがとてもよかった。

（ＮＨＫ側）

「わが心の大阪メロディー」は、年に一度、大阪発で全国向けに長く放送してきた番組だ。大阪らしさについて指摘があったが、大阪局全体としては、多様な番組で多彩な角度から大阪や関西の文化とその魅力を伝えていくことは当然ながら行っていくべきこと

だ。一つの番組にさらに大阪的な要素を入れる方法もあったかもしれないので、来年の参考にしていきたい。

（ＮＨＫ側）

「わが心の大阪メロディー」は、どの世代の方も楽しめるように、上沼さんの再登板やテーマパークからの中継など、話題性のあるものを詰め込んだ。ガチャガチャした印象を持たれたかもしれないが、大阪の魅力の一つとして演出した。「文字情報が多すぎる」という指摘については、冷静にもう一度見直したうえで、検討してみたいと思う。

（ＮＨＫ側）

この番組は、いろいろな世代が集まって、自分の好きなアーティストの話をしながら楽しんで見てもらえることを目指して制作した。「ガチャガチャした大阪を一面的に提示したのではないか」という意見は真摯に受けとめたいと思うが、基本的には楽しんでもらうことを念頭にしている。番組タイトルに合わせて、大阪のご当地ソングばかりで構成していくと、紹介できる曲は限られてくるので、ジャニーズＷＥＳＴの新曲と大阪の日本一のチアリーディングのコラボレーションのように、大阪をかけ算することで、大阪を魅力的な場所として発信した。次回以降は、関西のいろいろな文化、伝統、歴史などもこれまで以上に取り入れることもあるかと思う。また、「番組の宣伝が長い」という指摘だが、大阪局制作の看板番組と音楽番組でたっぷりコラボレーションして、戸田さんをはじめ、関西出身の出演者と楽しい話で盛り上がれたらよいと考えた。また、出演者の服装についての指摘についても、気をつけていきたい。「文字情報が多すぎる」という指摘については、月に一度大阪局から放送している「うたコン」と同じ手法を踏襲しているが、その根底に「情報があることはいいことだ」という意識もあったと思う。引き算の演出も、文字情報の指摘と重なる部分だと思うので、しっかりと検討してよりよい番組を放送していきたい。

○　第１９回にして初めて見たが、題名も司会の二人も「ザ!大阪!」という感じで、少し腰が引けながら見始めた。1 曲目の「大阪ラプソディー」から知らない曲だったが、子どもたちの楽しそうなダンスに元気をもらい、「ええじゃないか」の歌に合わせて、

出演者、観客全員がうちわで盛り上げる演出に苦笑いしながら見た。熊本城や首里城のように当然そこにあったものがなくなる精神的ダメージを考えると、地名の入った歌が人々の心に与える影響は決して小さくはないのだろうと感じた。テーマパークでのキャラクターや観客と一体化したダンス、大阪の食文化を含めたさまざまな映像、そして「スカーレット」の主題歌「フレア」と続いた。「晴れの日も雨の日も自分の力に変えていこう」と番組前半を大きくまとめながらさらに未来への希望を感じさせるＳｕｐｅｒｆｌｙのステージは圧巻だった。歌詞をきちんと文字で見たのも初めてだったので、音楽とことばと歌い手の力が一体となったステージに釘付けになった。そこからの最後までのスパートがすばらしく、煙が凄すぎて見えなくなるほどの西川さんの道頓堀でのパフォーマンスは楽しませてもらったし、チアリーディングもすばらしかった。見終わってみれば非常にボリュームのある番組をしっかり見ることができたという満足感があり、華やかだけれど地元感満載のエネルギーにあふれた「大阪メロディー」そのものの番組になっていたと思う。滋賀県を舞台にした「スカーレット」、滋賀県出身の西川さんがたくさん登場したこともうれしかった。

○　１０月２１日(月)の逆転人生「中国のカリスマ日本語教師　涙の青春スピーチ」を見た。売れない漫才師だった笈川幸司さんが、中国で日本語教師として成功し、2012年の日中の関係が悪化する中、日本語スピーチコンテストを開催しようと頑張る。そのきっかけになったのはテレビで見た教え子の存在だった。ＣＣＴＶに入社して日本の特派員となった教え子が、東日本大震災後に被災地でのインタビューの中で、「何にもなくなってしまった。今ほしいのは温かい人の心だ」と語る男性に、「抱きしめてもいいですか？」と声をかけて抱きしめる。その場面が番組のハイライトだったと思うが、笈川さんは、言語だけでなく、非言語のコミュニケーションもできる人を育てていたと感じられて、とても感動した。

○　新聞の投書欄で「スカーレット」に関するコメントを読んだ。滋賀県に住む８０代の女性は、７０年以上前の自分と重ね合わせ、懐かしんでいるとのことだ。小学校卒業と同時に、父母の故郷である現在の甲賀市信楽町に一家で疎開し、学徒動員で焼き物工場に通い、陶製の地雷作りをしていた。ろくろの上に乗せて、地雷の仕上げを一生懸命したということだ。このように、ドラマを通じて、自分の思い出を振り返り、最終回まで楽しみにしている方がいることをこの場で伝えておきたい。

○　来年の大河ドラマ「麒麟がくる」の出演者に不祥事があったが、すでに撮影した分は、そのまま放送してよいように思う。今から新たに撮影するよりも、すでに撮影した芝居のほうがいいものではないかと思うので、１１月３日(日)の大河ドラマ「いだ

てん～東京オリムピック噺（ばなし）～」の冒頭にあったようなことわりで十分だと思う。撮影し直すことに制作費をかけるよりも、新たに良質の番組を制作したほうがよいと思う。

○　「麒麟がくる」で不祥事のあった出演者の場面を差し替えるために大変な労力とお金を費やすのであれば、ことわりを入れてそのまま放送し、よりよい番組作りに注力してほしいと思う。

○　インフルエンザの報道をするのであれば、流行前にワクチン接種を呼びかけるなどの報道をすることが重要だ。大阪府はまもなく流行に入ると思うので、今月中のインフルエンザワクチンの接種を呼びかけて欲しい。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局

２０１９年１０月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１６日（水）、ＮＨＫ大阪放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、連続テレビ小説「スカーレット」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	篠　　雅廣	（大阪市立美術館　館長）
副委員長	帯野久美子	（関西経済同友会　常任幹事）
委　員	片山九郎右衛門	（公益社団法人京都観世会　会長）
	黒木　麻実	（公益社団法人　全国消費生活相談員協会 関西支部副支部長）
	小林祐梨子	（スポーツコメンテーター）
	鈴木　元子	（杉本や編集処　編集者）
	堀江　尚子	（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト 代表理事）
	矢崎　和彦	（(株)フェリシモ　代表取締役社長）
	安井　良則	（大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長）
	山舗　恵子	（京都リビング新聞社　編集部長）

（主な発言）

＜連続テレビ小説「スカーレット」第１週「はじめまして信楽（しがらき）」
（総合　９月３０日(月)～１０月５日(土)放送）について＞

○　陶芸家の話ということで、タイトルの「スカーレット」は、窯で燃える炎の色と主人公の情熱を表しているのではないかと思った。登場人物では、父親の川原常治の関西弁に親近感を持った。また、子どもたちがとても表情豊かで、個性があり、演技が上手だと思った。特に主人公の喜美子からは、戦後の貧しい中でもめげずにたくましく生きている様子が伝わってきた。オープニングの曲は好きで、クレイアニメーションもかわいくて好感を持った。

○　「スカーレット」の舞台の滋賀県は、かなり盛り上がりを見せていて、信楽の町や地元の人たちを元気づけている。高齢者だけでなく、リアルタイムでは見られない３０代、４０代の子育て世代の人たちも録画して見ているようだ。地元の人たちから評判なのはドラマの方言で、お年寄りが話すような方言ではあるが、信楽ならではの特徴が再現されている。特に慶乃川善役の村上ショージさんの方言が自然だ。子どもたちの演技も上手で、喜美子は最初のうちは大阪なまりだったが、信楽なまりになっていくのはすばらしいと思った。戦後の日常を丁寧に伝えており、子どもたちが見て笑えるような温かさを感じた。戦争を真正面から否定するのではなく、主人公のような貧しい家庭では昼ごはんにおにぎりを持ってこられないことを伝えることで、戦後の大変さが子どもにも伝わるようになっていると思った。最初はひらがなが読めなかった喜美子が､理科の教科書を頑張って読むことで､家での畑作りにつながった場面や、風呂のまきをくべることが生きていく知恵につながる場面などで、人が安全に豊かに生きていくための教えが本来の教育だと思えた。

○　連続テレビ小説は録画して、まとまった時間がとれるときに見ている。コンテンツがあふれる中でも、連続テレビ小説を必ず見ているのは、１話１５分、１週間という区切りに心地よさがあるからだと思う。連続テレビ小説は、舞台となる地域が盛り上がるだけでなく、「マッサン」ではウイスキー、「べっぴんさん」では刺しゅうキットなど、関連する商品の売り上げが伸びるほど、影響力が大きい番組だと常々感じている。今回の主題歌は、テンションが上がるいい曲だと思った。一方で、全般的に、子ども時代の俳優と大人の俳優で演技のトーンが違うように感じられて、違和感があった。

○　第１０話までは、子ども時代の主人公役の川島夕空さんが、意地っ張りで家族思いで優しくて健気な喜美子をしっかりと演じていた。第１週でまず印象に残ったのは、主人公の両親だ。父親は亭主関白で家族には迷惑をかけてばかりだが、困っている人を見たら必死になって助けてしまう。そのような父親を全面的に受け入れている優しい母親からは、秘めたパワーがこれから出てくるのだろうと思う。父親の無謀にも見える人助けが草間宗一郎との出会いにつながり、そうした恩が自分や家族に返ってきていると感じた。草間は、今後も喜美子の心の師匠として、人生を歩むうえでの道標となっていく人なのだろうと思う。ほかにも、友人の照子や信作など、ドラマを楽しませてくれそうな登場人物が出てきて、今後の展開が楽しみだ。大阪局制作の連続テレビ小説には、大阪を拠点とする関西のお笑い芸人が出演するが、村上さんが引退間近の陶工を演じていることに意外性があった。照子の母親役の未知やすえさんは“関

西のおばちゃん”の印象が強く、信楽一の窯元の奥さん役であることは意外だが、これからの展開に意味があるのだろうと思う。今回、主人公を演じる戸田恵梨香さんは演技力のある俳優で、神戸出身のため、安心して関西弁を聞くことができる。同じく関西出身の北村一輝さんとの親子の会話も楽しみにしている。

○　基本的に毎朝見ている。テンポがいいので忙しい時間でも楽に見られるし、いろいろな話が盛り込まれているのに、それを負担に感じずに見られるので、とてもいい脚本なのだろうと思う。主人公がたぬきの焼き物から本物のたぬきに導かれて、信楽のたぬきの恰好のような村上さんに会う場面には笑ったが、主人公が信楽の土地に入りこんでいったように、ドラマを見る私も物語の世界に入ることができた。ドラマでは、大人の世界も子供の世界も、喜びや悲しみ、人間の深いところもしっかりと見せていて、それがドラマの魅力につながっているのだと思う。また、登場人物も魅力的だ。大人の役者がうまいのはもちろん、個人的には、主人公の妹の直子の自然な演技が気に入っている。空襲のトラウマという設定はあるが、わがままぶりと空気の読まなさ加減、人のにらみ方など、天才的だと思う。子ども時代の直子が出なくなったのは残念だが、これから直子がどのようにドラマをかき回していくのかが楽しみだ。舞台はすでに大阪に移り、信楽が若干遠くなると思うが、久々に信楽に行ってみたいという気持ちになった。

○　朝の番組なので、活気があるドラマでとてもよいと思う。特に子どもたちの演技がとてもよかった。人物設定は、一人一人の背景、ストーリーがうまく紡がれながらも、つまびらかになっていない部分もあるので、見ている側もいろいろなことを想像できて、気に入っている。空襲や戦争の恐怖で、子どもにトラウマが残ることは実感としてなかったが、ドラマでさらっと触れたことで余計にリアリティを持って見ることができた。逆に、戦争のシーンがたくさん盛り込まれていると、次女の背景だけが浮かび上がりすぎるので、うまい省略のしかただったと思う。富田靖子さんの、母親役としてしっくりくる演技にとても好感を持った。今後ドラマの中で、信楽焼の作品も見せてもらえる機会があればよいと思う。これからもドラマを見続けたいと思う。

○　これまでも連続テレビ小説の１週目が戦後というのはよくあるが、戦後の貧しく、暗いイメージを感じさせないぐらい、明るく楽しく描かれていて、“つかみ”としておもしろいと思った。喜美子の子ども時代を演じる川島さんは、「み～つけた！」のスイちゃんだったと気づかないぐらいで、すばらしい演技だと思った。喜美子は水汲み、洗濯、風呂たきと家事をしながら一家を支えていて、見ている自分も元気づけられる。困った人を見捨てられない父親は、酒や金の面で問題はあるが、これからどう

いった父親になっていくのか、２週目以降も楽しみだ。大阪局制作の連続テレビ小説では、出演する芸人がいつも楽しみだが、村上さんの演技には感動した。村上さんのシーンで使っていた「往(い)に」のように、昔のことばは無くなってほしくないと感じた。美しい山里の風景や主題歌もあり、元気な朝を迎えるのにふさわしく、おもしろい番組だった。

○　初回の冒頭で炎が出てきたが、炎の強さと主人公の目力が内に秘めた力強さを感じさせて、どんなドラマになっていくのかと思った。その後、かわいらしいタイトルバックのクレイアニメーションが出てきて、一気に親しみやすく、ドラマに入りこめた。爽やかな主題歌がすがすがしい朝を迎えるのにとても合う。また、子役の演技がうまいと思うが、特に妹の直子役に注目していて、戦争中の体験からしんどい思いを抱えた役を上手に演じている。一方で、子ども時代の喜美子と照子のキスシーンが、一部で物議を醸すのではないかと気になったが、子どもたちの好奇心を表しているのか、照子の個性を出しているのか、今後の２人の関係性に関わってくるのか、どんな意味を持つシーンなのか興味を持った。子ども時代をもう少し見たかったと思うぐらい、出演する子どもたちの演技がよかったと思う。大阪局制作の連続テレビ小説では関西の芸人がたくさん出演するが、村上さん、未知さんに続き、これからどんな芸人が出てくるのか楽しみだ。親から「スカーレットとはどういう意味か」と聞かれたが、今後、その意味が明かされていくところがあればいいと思う。

○　直子役の子役の演技力、信楽の自然、ナチュラルな関西弁など、ドラマを堪能した。１週目の導入部分は大事だと思うが、とてもよくできていると思った。これまで連続テレビ小説を見ていて、ある時期から、終戦の描き方が「悲しい」「さみしい」ものから「明るい」イメージに変わってきたと感じていた。長い戦争が終わり、ある種希望に満ちた時代だったように思うが、「スカーレット」ではそうした部分もうまく描いている。子どもの中の貧富の差や、貧しさゆえの姉妹の葛藤、特に「なんで人は楽しい思い出だけで生きていけんのやろ」と空を見上げる場面は、子どもの秘めた悲しさがよく描けていた。そういう意味でも明るい終戦の中のつらい部分は上手に描けていた。一方で、戦後の田舎の貧しい家庭にしては、家の中の畳などが美しすぎると感じた。明るさを強調しているのかもしれないが、小道具や衣装などはあえて時代を反映しないようにしているのか。あるいは、そういう時代を反映させるような世代のスタッフは、番組制作の現場からいなくなったのだろうか。

○　数年前から「陶芸女子」ということばがある一方、基本的に陶芸は男の世界である中で選ばれたテーマだと感じた。村上さん演じる陶工は、慎重に「陶芸家」と「陶工」

ということばを使い分けていたが、実は高名な陶芸家という展開を期待していた。主人公が新聞紙から出した茶碗を見て「なにこれ失敗作！」と言っていたが、文字通りに失敗作でしかなく、期待外れでほほえましく思った。主人公が陶工の作品をけなしたときに草間がたしなめたが、彼は、今後の展開の中で、主人公が人生を歩むうえでのメンターとして、時折登場するように思う。また、オープニングのクレイアニメーションは、制作に何日かかったのかと思った。

（ＮＨＫ側）

滋賀ことばについては、ことば指導の西村頼子さんが、信楽を訪ね、主人公と同じ世代の８０代、９０代の方に、細かい語尾などいろいろ聞いて勉強したということだ。全国の人たちにもわかることも重視しながら、細やかな指導をつけている。主人公の妹の直子役のやくわなつみさんは、芝居の経験がないので、天性の勘があるのだと思う。登場人物について、脚本家の水橋文美江さんと話し合い、劇的なことを勧善懲悪の物語の中で起こしていくのではなく、善悪両面あり、完全ではない善意のある人々が集まり、少しずつ幸せがつくられていくという話を目指している。登場人物に魅力を感じてもらえるとしたら、水橋さんが丹念に会話を紡いでいる結果だと思う。喜美子と照子のキスシーンは、子ども時代に兄を戦争で亡くしたことを照子がずっと引きずっていくことを反映させつつ、２人の女の子の幼い頃のエピソードとして入れた。

○　数年前に放映された「ひよっこ」に続き、今回描かれた時代も懐かしさでいっぱいだ。風呂はまきで火吹き棒を使っていたし、ラジオの「笛吹き童子」に夢中だった。紙芝居屋が自転車で来て、拍子木を叩いて子どもたちを集め、せんべいを配っていたことを思い出した。大昔ならいざ知らず存命者のいる時代考証はかえって難しいのではと思った。第１回の冒頭で「火事だ」と叫んで窯に水を掛けようとしたシーンは不自然だった。窯業に関わる人間が集まる社会で、窯と火事を勘違いする人間がいるとは思えなかった。

＜放送番組一般について＞

○　９月６日(金)の京都スペシャル「宮本組　旦那たちの祇園祭」(総合 後 8:00～8:42 京都府域)を見た。山鉾（やまほこ）の人たちの間でも話題になっているのではないかと感じた。冒頭の八坂神社の映像でタイトルが出るまで実に厳かで、全体を通して、映像、語り、登場人物、描き方も、ラストの集合写真が出るところまで、すべてが格

好よかった。組頭の原悟さんが自分のルーツを語るところや、副組頭の櫻井功一さんが地上げを断ったところなど、ドラマを見ているようで、それだけ祇園祭に思い入れが深い人たちであることが伝わってきた。そんな中で、新人の霜降太介さんが「命より大事なお宝」ということばに戸惑っているところから、「そもそも宮本組とは」「祇園祭とは」と話が展開していき、どんどん引き込まれた。そもそも山鉾についての番組は多いが、宮本組についての番組はあまりないので、とても興味を持った。霜降さんの宮本組の歴史と伝統をひもといていこうとする姿も、宮本組の歴史をつないでいこうとする姿勢をうまく映し出していたように思う。全体を通して、祇園の過去、現在、これからについて印象的なことばが多く語られていた。「1,000 年続くもの、変わっていくもの」、「町の精神を残せたらいい」、井上八千代さんの「祇園の町は、時代を拒まずそして流されない」ということばには、宮本組、祇園町に限らず、ひいては京都、今の日本全体にあてはまると感じて、心に残った。疑問が残ったのは、みこしの模型を３つ買ったと話していたが、宮本組として買ったのか、原さん個人が買ったのかということで、どちらか知りたいと思った。

○　祇園祭に行ったことがなく、宮本組と聞いてもぴんとこなかったが、番組を見終わったあとに、祇園祭を実際に見てみたいと思った。冒頭から組頭の原さんが格好よく、大画面のテレビでもう一度見たいぐらい、すばらしいドキュメンタリーだった。番組では、宮本組が交通整理や資金集めなど裏方をする様子を紹介されていたが、どういうことをしているのか、宮本組の名前の由来、組員数なども詳しく知りたいと思った。私も祭りが盛んな地域に住んでいるが、原さんの「あほなんやろね」ということばが人間味あふれるいいことばだと思った。番組では、祭りを通して、和菓子など京都の伝統、課題、これからの未来を見せていてよかったと思う。若手の組員が、宮本組が始まったきっかけを、番組の中で知ることになるというのも驚きだった。若手の組員が小さな娘を抱く場面から、「遠い過去と遠い未来をつなぐ祇園町の旦那たち。1,000 年先のこの町でどんな祭りが見られるのか」というナレーションで番組が終わったのはとてもすてきだと思った。

○　大変興味深く、とてもよい番組だったと思う。祇園祭、中でも宮本組に注目して取材したのはよかった。「御神宝は自分の命より大切だと思って下さい」という組頭の原さんと、まだ戸惑いのある新人の霜降さんの対比もよかったと思う。最近、地上げの話をよく聞くが、地元を離れられないというジレンマに悩む櫻井さんの話は身につまされた。祇園の町は、生活と文化、そしてお祭りが全部一体となっていて、関わる人たちの中に魂が宿り、エネルギーが満ちてくることが、番組を通してよく見えてよかった。だからこそお菓子屋の今西善也さんの話は、これからとても大事な話になる

と思い、よく取り上げたと思う。最後に「今まで町の人たちが努力してきたおかげで今がある。それを勝手に商売のネタに利用していくと大事なものが劣化していく。大事なものをキープしてもっとよくしていかないといけない。それがお祭りではないか」ということばにも納得した。今回の番組をきっかけに、歴史もの、神事などに派生した番組作りができると思うが、工芸や祭りに携わる他の人たちにクローズアップすることもできると思う。また、宮本組について丁寧にまとめた本が出版されたので、番組で触れてもよかったと思う。

○　とても勉強になる番組だった。これまで祇園祭は山鉾を遠くから見るお祭りという印象だったが、毎年、神事を行い、祭りを命がけで守っていることを知り、感動した。番組でもあったが、行列を平気で横切る人もいるし、電気を暗くして神様がみこしに移るときも、ぱっと電気がついたとき、拍手をする人もいる。本来無用の拍手だと思う。神様に対する心や接し方など、以前とは変わってしまっている現代人の揺らぎを、番組を通して明確に見せていたように思う。ナレーションの抑えた声もよかったし、冒頭の場面からとても格好よさを感じた。後半は謎解きの要素もあり、引き込まれた。一方で、宮本組の組員がふだんどのようなことをしているのか、もっと細かい神事があるのか、組員の構成や人数を知りたいと思った。番組では祇園が新しい町だといわれていたが、祇園の成り立ちや、印象的な紋が気になったので、別の番組で詳しく取り上げてほしい。

○　この番組を見なかったら、祇園祭について間違ったイメージを抱いていたままだったと思う。現在の祇園祭の根幹を支える旦那衆に対して正面からよく取材できたと感じたが、現在の組頭の原さんが情報発信をいとわないオープンな方だからなのだろうかと思った。祇園祭が 1,150 年前の平安時代から続いていることや、神様の御霊が落とされたみこしが、町中を渡って御旅所(おたびしょ)に安置され、その後町中を渡って、八坂神社に帰っていくことが本来の祭の中心であることを知った。宮本組が御神宝を持って先導するみこしに出会ったら、待たされることが嫌で、その行列の意味を知らないままに道を横切ってしまったかもしれない。そして、祇園は比較的新しい町だということは意外だったが、蛤御門の変での京都の大火、明治維新で東京に都が移ったことなどによる祇園祭存続の危機以降、祇園の町衆が中心的役割を果たし続けてきているということがよく理解できた。祭を通して、初代組頭を筆頭とした旦那集が祇園の発展に果たした役割は大きいと感じた。祇園祭といえば、毎年テレビで取り上げられる宵山と山鉾巡行しか知らず、大混雑するので行くものではないという印象しかなかったが、機会があれば、御旅所に安置されている神様を拝んでみたいし、後の祭りである環幸祭(かんこうさい)に行って、宮本組が先導する姿を見たいと思った。

お菓子屋の主人が見せてくれた一番古い木型には元治元年と書かれていた。元治元年といえば、蛤御門の変が起こり、どんどん焼けが京都で発生した年だ。宮本組が結成され、祇園の旦那衆が祭りの運営の先頭に立つきっかけとなった一連の出来事が始まった年で、この木型は 150 年以上にわたって明治以降の祇園祭と祇園の町を見守ってきたもので、いかにも京都らしいと感じた。

○　毎年、宮本組が祇園祭を支えていることはすごいと思うとともに、守っていってほしいと感じた。祇園祭に行ったことはないが、テレビの映像を見ただけで行った気持ちになっていた。しかし、この番組は、今までと別の観点から取り上げていて、映像の持つ新たな表現の可能性を感じた。この番組があることで、宮本組の組員たちが奮い立つ。これから先、祇園祭が 100 年も 200 年も残っていく大きなきっかけになると思った。

○　番組冒頭の厳かなシーンで、祇園祭が神事であると実感した。御旅所でたくさんの人が参拝する様子を見て、神の気配を感じた。この風景とナレーションの声がとても合っていたが、それ以外の日常のシーンでは、別の方のナレーションのほうがよかったと思う。祇園祭で、神が乗っているみこしの前を横切る人たちを、宮本組の人たちが注意する場面を見て、日常の私たちは信仰と関係なく生きていることが印象に残った。この番組を見れば、信仰と生活の結びつきを実感できるのではないかと感じた。

○　祇園祭はいつから何がきっかけで始まったのかということや祭りの意味も知らずに観光客気分で見ていたが、3 基のみこしが八坂神社を出発して四条の御旅所まで巡行することも、今回初めて知り、本当に勉強になった。祇園祭が 1 か月にわたる長い祭りであることは知っていたが、興味が沸いて調べてみると毎日いろいろなことを行っていることがわかった。京都に古くから住む人にとっては、先祖から受け継いできて、自分たちの代で絶やすわけにはいかない大事な神事だ。この伝統を絶やさず守っている家があると思うが、伝統をつないでいくことの裏には苦労があることがよくわかった。京都の祭りは、時代祭や葵祭に見られるように静かで厳かなお祭りが多いが、山鉾巡行はみこしを担いで、かけ声も勇ましいことが意外だった。京都を訪ねるたびに、外国人向けのホテルやおしゃれなカフェが増えて、町並みが変わっていくが、京都の古い町屋はそのまま残ってほしいと思う。今回、宮本組の役割や発祥にスポットが当てられていたが、みこしを担いでいた三若組、四若組と、宮本組の関係性なども取り上げてほしい。

○　日常で神事に触れることはあまりないが、音楽やカメラワークを効果的に使って、

神事の神秘性をうまく捉えていて、とても感動した。京都の町の変遷の中で、蛤御門の変で焼け野原になったということ、都が東京に移ったことが、宮本組結成のきっかけになっていたことも知った。京都が世界都市になって集客しているのは、歴史的な寺社があるということだけではなく、町を守り続けてきた人の営みや心があってのことだと改めて認識した。1,000 年以上守り続けてきた「命よりも大切な」ということばに象徴されるような、人の思いが感動を呼ぶのだと思う。神を信じていない日本人は多いが、初詣や七五三で、寺や神社に行って手を合わせるといった行動そのものは大切にしており、それは日本人の心の原点のような行為だからだと思う。この番組を海外にも紹介してほしいと思うし、こうした日本の心の原点を紹介するような番組を、今後も制作してほしいと思う。

○　歴史学では、伝統はあるものか、作られるものかという定番の論議があり、大体は作られるものだといわれているが、この番組では伝統を守る姿が描かれている。祇園の町、京都の町中に、外部の資本が入ってきて、町並みが変わってきているが、こうしたことに対する危機感が番組に表れていたと思う。町のあり方を守っていこうとする祇園の人たちの心意気がうかがえた。また、景観を守るのは行政の責任だと思うが、どういう町にしていくかはそこに住む人たちの心意気だ。宮本組に賛同する外部の力が新たに入ってこないと、伝統が守れなくなるのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

宮本組の人たちの、遠い過去と未来を結んでいこうとする姿勢、自分たちの目の前だけでなく、未来のことも含めて考える姿勢などは、学ぶことが多くあったと思う。宮本組には何人いるかについてだが、ふだんは主に祇園町の老舗の旦那衆２０人が活動している状況で、祇園祭の時は７０人ぐらいに増えるということだ。祇園祭以外のときにも、八坂神社の倉庫の大掃除など、月１、２回ほど集まり、八坂神社への奉仕をふだんからしている。宮本組の人たちはお宮のおかげで自分たちの商売が成り立っていると考えていて、まさにお宮のもとにあるということが、「宮本組」の名前の由来だと聞いている。

○　祇園祭は色々な切り口で紹介されてきたが、今回の地に足の付いた京都放送局の取材には感心させられた。特に井上さんの「祇園の町は、時代を拒まずそして流されない」ということばに、京都人の気概と伝統を守る事への意気込みを感じた。

○　１０月１２日(土)は、東京に大きい台風が直撃することが心配で、一日中ＮＨＫの台風情報を見ていた。こういうときにＮＨＫの報道はありがたいと思った。

○　「ニュース 630　京いちにち」で全国的な話題を取り上げる際に、地元を意識した紹介になっていたのがよいと思った。９月１９日(木)の放送では、ラグビー日本代表の山中亮平選手が、試合に出られない期間も、元日本代表の故平尾誠二さんに支えてもらっていたことが紹介されていた。京都には平尾さんを好きな人が多いと思うのでよかったと思う。また、１０月１０日(火)の放送では、ノーベル賞を受賞した京都大学工学部出身の吉野彰さんについて伝えていたが、地元の電池メーカーなども絡めて紹介していてよかった。今後も地域番組では地元の視聴者が身近なニュースだと感じられるような伝え方をしてほしい。

○　９月２日(月)～６日(金)の「ならナビ」で「紀伊半島豪雨８年」の特集を見た。復興の様子や、現在も残る課題、台風による過疎化などを取り上げられていた。紀伊半島豪雨については毎年取り上げているが、台風や豪雨は毎年のように来るものなので、今後も番組を継続して制作してほしい。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局

２０１９年９月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１８日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「２０１９年度後半期の国内放送番組の編成」および「２０１９年度後半期の近畿地方向け番組編成」についてそれぞれ説明があり、「２０２０年度の番組改定」とあわせて意見交換を行った。会議では、事前に視聴してもらった、ＮＨＫスペシャル「半グレ　反社会勢力の実像」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	篠　　雅廣	(大阪市立美術館　館長)
副委員長	帯野久美子	(関西経済同友会　常任幹事)
委　員	片山九郎右衛門	(公益社団法人京都観世会　会長)
	黒木　麻実	(公益社団法人　全国消費生活相談員協会 関西支部副支部長)
	鈴木　元子	(杉本や編集処　編集者)
	堀江　尚子	(認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト 代表理事)
	矢崎　和彦	((株)フェリシモ　代表取締役社長)
	安井　良則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)
	山舗　恵子	(京都リビング新聞社　編集部長)

（主な発言）

＜「２０１９年度後半期の国内放送番組の編成」および「２０２０年度の番組改定」について＞

○　来年はオリンピック･イヤーで、世界各国の人たちの関心は日本に向いているので、文化についても紹介してほしい。放送全般でいうと、スポーツを取り上げている時間が圧倒的に多いので、オリンピック後もあわせて、文化の分野も応援してほしいと感じる。外国人もたくさん日本に来るので、オリンピックの放送では、競技と競技のイ

ンターバルを利用して、日本の工芸・文化・芸術を紹介するといった工夫はできないか。

＜ＮＨＫスペシャル「半グレ　反社会勢力の実像」
（総合　７月２７日(土)放送）について＞

○　見終わって後味が悪かったが、考えさせられる番組だった。半グレ集団は身近に存在していて、外見だけではわからないだけに、暴力団以上に恐怖を抱いた。大阪のミナミの半グレグループ中心メンバーがインタビューを受けていたが、本当のことを話していないと感じた。３０代で店を数店舗経営して毎晩豪遊している姿を見て憧れる若者たちが大勢存在するということだが、こうしたこともＳＮＳの普及が大きく関係していると思う。犯罪に加担した京都の大学生が出てきたが、反省しているそぶりを見せているものの、「大企業に就職したい」と答えている姿を見て、なぜ逮捕されていないのか、憤りを感じた。今後は若者に対して、被害者側だけでなく、加害者側にならないように啓発していくことが重要だと感じた。半グレの中心メンバーの２人の男性の生い立ちを知りたいと感じた。

○　番組を通じて、半グレの実態を明らかにしてもらったことに感謝している。日常生活で生きるうえで、被害を食い止めるためのヒントがたくさんあった気がする。インタビューに答える半グレメンバーの男性の手がクローズアップされているのを見て、本当は悪いことをしているというのが伝わり、印象的だった。詐欺の加害者側の大学生がインタビューを受けていたが、自分の家族が加害者側になる可能性を表しているように感じた。被害を受けた女性が勇気を出してインタビューに応じたおかげで、今後助かる人が増えるのではないかと思う。有名大学の学生が詐欺に関わる状況は、「試験の点数さえよければよい」という高校までの教育や周囲の大人たちがこのような状況を生み出しているのではないか。「仕事は何のためにするのか」を高校生までに教える必要があり、自分たちにもできることはあると思う。建て前ばかりの社会において、半グレメンバーが自信にあふれ本音で生きている様子に、若者が魅力を感じてしまう面はあるのではないかと感じた。

○　詐欺被害にあった女性が痛ましく、一度は番組を見るのをやめてしまった。この犯罪に加担しながら逮捕を免れた大学生が、「この仕事で培ったコミュニケーション力を生かして一流企業で働きたい」と述べていることに愕然とした。暴力団対策法が施行されて以降、暴力団に替わる形で、半グレの勢力が台頭している。暴力団のように強固な組織ではない分、実態を把握することが困難で、暴力団ではないことから気軽

に犯罪に加担していると感じた。かつて暴力団が担ってきたような組織犯罪は変容し、巧妙化しつつある実態に、警察は十分に対応できていないと思うので、ＮＨＫには今後も半グレの取材を継続し、広く情報発信してほしい。実態解明が困難な半グレに対する取材をこれだけできたことや、詐欺グループの人たちが気軽に取材に答えていること、また、放送後に番組に出演していたミナミの半グレの男性が恐喝で逮捕されたことを知って驚いた。

○　これまで見た番組の中でもっとも衝撃を受けた番組だった。どれほどの人が半グレの実態を知っているのかと思い、すべての人が見るべき番組だと思った。さらにＮＨＫには、半グレの実態を掘り下げるような取材とともに、多くの人に知ってもらえるようなキャンペーンを期待している。

○　見終わって薄気味悪さを感じるとともに、いろいろと考えさせられる番組だった。日常と犯罪の境界がとてもあいまいで、犯罪集団の組織的形態が流動的であることに本当に驚いた。社会の闇の深さを感じた。有名大学の学生が犯罪に加担して、反省していないことも恐ろしかった。番組の制作者たちはこうした人たちによく接触できたと思う。これからも継続的に取材するとともに、犯罪を行っていても組織でないから暴力団対策法で規制できないという不条理についても追及してほしい。番組の演出もよかった。冒頭、オダギリジョーさんのナレーションとリアルな夜の街の風景で始まり、ミナミの半グレとされる２人の男性が登場する。そのうち、一見穏やかに見える男性が抱える闇の部分がどんどん見えてきた。最後は、彼を慕ってやってきた女性ファンが出てきた場面で終わるのが暗示的だと思ったが、そのあとの彼女のことも心配に感じた。また、暴力団と半グレ集団を現す模式図もわかりやすいと思った。暴力団はきれいなピラミッドで表現されていたのに対し、半グレは、立体的に人物にも影を落として描かれていたので、より身近なところに迫ってきて、浸透していることがよく感じられた。所々にムクドリの映像が挟まっていたが、不安をイメージさせるうえで非常に効果的だった。

○　とてもよく構成されている番組だと思った。ミナミの半グレの手が印象的で、雄弁だと感じた。人をだまして恥じないことは、道徳的に重い罪だと思うので、こうした事実を大いに伝えてほしいと思った。「弱肉強食の現代ビジネスとして恥じることはない」と若者に説いて回るような人たちを、受容しない社会になればよいと思った。京都で多くの女性をだまして風俗店へ送り込み捕まった大学生による詐欺事件、この黒幕も半グレだったことを知り、驚いた。かつての暴力団の世界は分かりやすく、私たちが踏み込まなければ関係ないと思えるものだった。一方、半グレは「犯罪技能者

集団」で、私たちの身近に潜んでいることに恐ろしさを感じるが、これまでの教育によるものだろうかと感じた。1980 年代のころに暴走族を扱った小説や漫画がたくさん出版されていたように思うが、半グレにとってメディアに出るメリットがあるならば、メディアは一定のルールを作るなど取り上げるときの方向性を十分に検討してほしいと思った。

○　顔と実名を出した半グレの２人はもちろん、詐欺事件の加害者の大学生、被害者の女性はよくインタビューを受けたと思うが、そこに至るまでには、取材者側の相当な苦労もあったように思う。いちばん衝撃を受けたのは、６０人以上の大学生が加害者として関わっていたことと、インタビューを受けた大学生のコメントに思いやりやルール、モラルといったものが欠如していることだ。「詐欺に転職する」といった表現もあったが、詐欺が悪いことだという意識がないような人たちが増えているならば、本当に怖いことだと思う。こうした人たちが逮捕されず、社会人になっていくとしたら末恐ろしいことだと思うので、違う角度から追い続けてほしい。オダギリさんのナレーションは引き込まれたし、番組を見る側にも考える間を与えてくれてよかったと思う。一方、スナックを思わせるようなオブジェや、鳥の群れの集団など象徴めいた映像を入れる演出はあまり好きではなかった。この番組を見た半グレの人たちの感想を知りたいと感じた。

○　半グレという存在を社会に提示したという意味で、非常に重要な番組だと思う。「半グレが最も多く集まる大阪ミナミ」というナレーションがあったが、１０年ほど前に、地元の方々がミナミの浄化活動に取り組み、ある程度安心して歩けるようになったと記憶している。その後、このような状況になっているので、犯罪を生み出さないまち作りの大切さを痛感した。また、反社会勢力が組織単位でなく、個人単位になってきていることが大きな変化で、取り締まることが難しくなっていると感じた。かつてであれば暴力団の組織に所属するというハードルがあったが、今は個人が副業や社会勉強だと思って気軽に参加するなど、個人を中心にした活動であるところに驚いた。番組の最後に、「この殺伐とした現実にどうあらがえばいいのか」というナレーションもあったが、単なる問題提起なのか、解決に向けてどうすべきかというヒントがあるのか知りたいと思った。

○　今の犯罪は、一対一のスマートフォンの中で起きてしまうような危険な状況だと感じた。番組に登場した、短絡的に犯罪に加担するような若者がこれから未来を担うことになると思うとやるせない気持ちになった。半グレ集団が暴力団対策法の取り締まりの対象にならないグレーな存在で、かつての暴力団に比べて気軽に抜けられると番

組で伝えられていたので、若者も誘われたら気楽に入ってしまう可能性を感じた。公共放送として、伝え方には注意を払う必要があると感じた。また、半グレの男性を九州から訪ねてきた女性ファンが登場したが、このような人を見たときに、取材者はいさめることはあるのだろうか。また、取材相手から取材費を要求されることはないかとも感じた。半グレの男性がたばこをふかす場面が多かったので、たばこの持つネガティブなイメージが間接的にダーティーな印象を与える演出になっていたように思う。

○　ＮＨＫに個人が取り上げられることはある種の「勲章」であり、社会にＰＲすることにあたる。社会の片隅で努力している方々に光を当て顕彰する場合はいいが、実名で顔を出して伝える場合は慎重であるべきだと感じた。

○　一般人でも暴力団でもないグレーな存在、「半グレ」。この呼び名も今回初めて知った。被害総額年間 360 億円の特殊詐欺の背後で、一般人と隣り合わせにいる半グレをこうしたメディアで取り上げることは、被害者にとって果たしていいものかと困惑した時間でもあった。当事者にもインタビューする中で感じる怒り、リアルな現実をそのままストレートに映し出される映像は衝撃の連続だった。かなり踏み込んだ内容で、暴力団同然のように見えるこの集団は暴力団よりも恐ろしい存在なのではとも感じた。この番組のメインは誰なのだろうか。彼らグループの肩を持つことはもちろんありえないが、能天気に悪気もなく生きている彼らの悪の部分が何か美化されているような印象も受けた。このような番組を放送する意義はあるとは思うが、番組にも出てくる被害者にはやり場のない気持ちがあるはずなので、この番組を見てどう感じるのだろうかと思った。

（ＮＨＫ側）

半グレは、暴力団とは異なる、つかみづらい犯罪グループで、その実態を明らかにすることが番組の目的だった。そこでかなり内部に入り込み取材を重ねて、映像で見せることでインパクトのある番組が制作できた。この番組の放送後、非常に大きな反響があり、新聞や雑誌には「ＮＨＫの番組でも取り上げられた半グレ」として特集記事がいろいろと掲載された。今、法律で取り締まるのは難しい段階だが、実態を示すとともに、世論の喚起につながってよりよい方向に向かっていくことになればと考えている。継続して取材を進めてほしいという意見もふまえて、さまざまな取材を検討していきたい。

（ＮＨＫ側）

担当したディレクターは、数年前から半グレの問題に気づいていて、ワイドショーなどでの取り上げ方では彼らの社会的脅威の大きさが伝わっていないのではないかと危機感を抱き、かなり前からアプローチをしてきた。振り込め詐欺の実態を明らかにする番組を取材した記者など、チームで時間をかけてアプローチをしながら番組を制作していたところ、お笑い芸人の“闇営業”問題を取り扱う中で半グレが報じられ、番組も驚くほど注目された。取材相手がインタビューをなぜ受けるのかという質問があったが、特別な取材やお金の使い方をしているわけではなく、何度も通い続けて説得して撮影に応じてもらった。京都の詐欺事件では、女性被害者がのべ 260 人といわれているが、実際に裁判等で被害認定されたのもごく数人で、泣き寝入りをしている人も多い。インタビューに応じた女性は、そのことに怒りを感じていて、勇気をもって話をしてくれた。こうした取材相手には不利益のないよう、映像やナレーションに配慮をして放送している。ムクドリが離合集散を繰り返す映像は、半グレの取材で感じた薄気味悪さを映像で表現したものだ。番組を見て半グレ集団に参加しようとするのではないかという指摘については、議論を重ね、映像やナレーションの表現に配慮をして制作したつもりだ。そういう指摘をいただいたことは今後の参考にしたい。女性ファンが何時間もかけて会いに来ることがあるということはわれわれにとっても衝撃で、そうした人たちは男女問わずたくさんいるということだ。それがいつしか末端の働きをしてしまうというようなことがあったので、最大限の配慮をしながら放送した。また、犯罪集団に対しても、取材中に犯罪をほのめかすことを見聞きしたら、批判的なことばを投げかけるようにしている。

＜放送番組一般について＞

○　８月２日(金)の紀の国スペシャル「前畑がんばれ！日本初の女性金メダリスト誕生秘話」(総合 後 8:00～8:28 和歌山県域)を見た。この番組を見て、前畑秀子さんが和歌山県橋本市の出身であることなど、初めて知ることが多かった。１８歳で初めて出場したロサンゼルスオリンピックで銀メダルをとって引退しようとしていたのに、周囲の期待もあって引退を思いとどまり、猛練習の後に２２歳でベルリンオリンピック日本人女性初の金メダリストとなるまでには、非常に大きな苦労とプレッシャーがあったことを想像させられた。血のにじむような努力をしている人に向かって、「死んでもいいから勝ってこい」と言われたということだが、ベルリンオリンピックに参加していた当時の日本の雰囲気を知ることができた。表彰式の写真では、表彰台でうつ

むいて涙を流している前畑さんの脇で、２位のドイツの選手や、役人らしき人がナチス式の敬礼をしていて複雑な気持ちになり、当時の時代背景を感じた。ふだんは大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～」を見ていないが、９月２２日(日)の「前畑がんばれ」の回では、アナウンサーの絶叫シーンが再現されるようなので見たいと思った。

○　前畑さんの生涯がよくわかる、よい番組だった。番組冒頭で「紀の川なくして前畑なし」ということばが紹介されたので、オリンピックの金メダリストを生むに至った川の特徴など、説明があればよかった。現在でも前畑さんのことを知る人もたくさんいると思うので、地元の人たちの声があったらよかったと思う。また、「いだてん」の宣伝要素が強すぎると思った。前畑さんを演じる上白石萌歌さんへのインタビューで「大河ドラマをどう見てほしいか」という質問をしていたが、「大河ドラマを通して前畑さんをどう見てほしいか」という質問のほうが、番組の趣旨に沿っていると感じた。

○　「前畑がんばれ！」のフレーズは何度も聞いたことがあるが、前畑さんが橋本市出身だとは知らなかった。一途な努力が報われる時代のオリンピックのよさを感じた。戦争へと向かっていく中で、批判を受けながらも明るい笑顔で通せた前畑さんは偉いと思う。番組で応援する人の映像を見て、本当に透き通った目の人が多く、心が洗われる思いがした。前畑さんのいい笑顔と「自分らしく生きる」ということばが実によかった。自分も「三途の川は平泳ぎで渡るわよ」というようなことばを残して死にたいと思った。

○　「いだてん」を毎回欠かさずに楽しみにしているので、ドラマではわからない前畑さんの家庭のことや生い立ちもわかり、「前畑がんばれ」の回の予習として本当に楽しめた。一方で、和歌山の視聴者にとってはうれしい番組だったと思う。現在、郷土のことを誇りに思える強さが欠けてきていると思うので、番組で地方にいい影響を与えていくことがＮＨＫの一つの役割だと改めて思った。

○　生まれながらに才能を持っている人がたくさんいるとしても、それが花開く場合と開かずに散っていく場合とがあるかと思うが、前畑さんの場合は、その才能を周りの人が見いだし、本人も頑張り「世界の前畑」になった。その後も亡くなる寸前まで水泳を教えていて、とてもすてきな人生だと思う。いろいろな分野で才能が開き、周囲にも還元していくような社会になることが必要だというメッセージを感じた。映像とともに「前畑がんばれ」という実況を聞いたことがあるが、前畑さんのストーリーを

知った後に聞くと、実況している方の魂の叫びに感じられて、感動した。以前に比べると地域に対する関心は全体的に薄まっているように思うが、こうした地域の番組を手軽に見られるといいと思った。「いだてん」の番組宣伝部分はなくてもよいと思う。

○　冒頭に、前畑さんが紀の川で水泳技術を身につけたという話が出てきたが、紀の川で金メダリストがどのように育ったのかがよくわからなかった。紀の川のおかげでというのであれば、泳ぎに適する川であることの説明があってもよかったと思う。タイトルから、前畑さんの一生を紹介するのかと思ったら、「２２歳で金メダルをとって結婚、そこから子育てが一段落した５０歳を過ぎて」というナレーションに違和感があった。２２歳から５３歳まで何をしていたのかという説明があれば、地域のつながりの中で、亡くなるまで自分の得意なことで貢献したという姿がもっとはっきりと見ることができたと思う。私は、前畑さんのことを知らない世代なので、番組の最後の実況の場面には本当に感動した。国を挙げて心から応援する実況とはこういうものだと実感したので、実況を際立たせるためにも冒頭と最後の部分を工夫したらよかったと思う。

○　前畑さんは、日本人女性初のオリンピック金メダリストということで、有名なアナウンサーの実況も何度か聞いたことがある。「いだてん」を宣伝する番組だと感じたが、前畑選手がロサンゼルスオリンピックで銀メダルをとっていた回をたまたま見ていたので、そのことを紹介していると思った。オリンピックやパラリンピックに出場する選手たちは命がけで練習に励んでいると思うが、応援する側としてはメダルをとってほしいとプレッシャーをかけてしまいがちだ。前畑さんもロサンゼルスオリンピックの銀メダルをとったあと、今度こそはと日本国民全員から期待をかけられたプレッシャーは本当に大変だったと思う。練習で２万メートル泳ぎきる精神力は見事なもので、女性初の金メダルを獲得した姿は格好よいと思った。「２２歳で金メダルをとって結婚、そこから子育てが一段落した５０歳を過ぎて」というナレーションがあったが、子育てが一段落するのはもう少し前だと思うので、再び水泳に携わる５３歳までは何をしていたのかが気になった。脳梗塞で倒れてもリハビリで復帰し、亡くなるまで水泳選手の育成に携わり、泳ぐことが好きだったということがよくわかった。この番組を見て、来年のオリンピックは家でゆっくり観戦したいと思った。

○　ほっとした気持ちになれる、温かい番組だった。そう感じられたのは紀の川が名脇役になっていたからだと思う。人と水とのかかわりが感じられて、気持ちが安らいだ。前畑さんの実家は貧しかったが、地域の方々が寄付をして彼女の選手生活を支えたということだ。現在の日本で失われつつある地域の中での人と人とのかかわり合いがあ

るように感じた。1936 年のベルリンオリンピックに出て勝つということが日本にとって重要だったからこそ、「前畑がんばれ」という名実況が生まれたのだと思う。また、「とったのがなぜ金メダルではなかったのか」と言われるアスリートの苦悩が描かれていたが、それを乗り越え、金メダルをとったところが感動をよんだと思う。「三途の川を平泳ぎで泳いで渡るわよ」ということばもあったが、なかなかそうした信念をもてるものではないし、その強さが感動を与えたと思う。自然や人とのかかわりや、前畑さんの生き方に感動する中、「いだてん」の宣伝的要素に違和感があったが、全体にはよい番組で、地方局ならではの番組だったと思う。

○　オリンピック前の前畑さんは「死んでも勝ってこい」ということばを雨のように浴びたということだが、他の人の声を意識することで、スポーツをすることや競争を純粋に楽しめなくなることなど、オリンピックにはさまざまな功罪があることをしっかり伝えるべきだとも思う。故郷の顔として育てられて、世界のひのき舞台で金メダルをとった、前畑さんの明るい笑顔が印象的だった。

○　地元でも知られていないエピソードが満載で、興味深く見ることができた。私自身は山育ちで泳げないので　三途の川では前畑さんに助けてもらいたいと思った。

（ＮＨＫ側）

地元の橋本市では、前畑さんは郷土が生んだ偉人として非常に誇りとされているので、ＮＨＫとしても、前畑さんのことは一度取り上げたいと思っていた。今回、大河ドラマの中で前畑さんが登場するので、番組で取り上げることにした。違和感があったかもしれないが、大河ドラマのＰＲも行った。和歌山県域放送では、２８分間の「紀の国スペシャル」で放送したほか、午後６時３０分からの「ギュギュっと和歌山」の中でも、俳優の上白石萌歌さんのインタビューなどパートに分けて放送した。全国放送でも、この番組は、８月に午前４時台、５時台の早朝に２回放送している。また紀の川流域では、前畑選手のほかに、オリンピック選手を何人か輩出している。前畑さんの同年代には、小島一枝さん、また戦後には古川勝さんという金メダルをとった選手がいる。今回、意見をいただいたように、紀の川がなぜたくさんの水泳選手を生んだのかという視点は、新たな番組を制作するうえでヒントとしたい。

（ＮＨＫ側）

今後、前畑さんの生涯をテーマに、新たに番組制作を検討しているので、いただいた意見を生かしたい。紀の川が前畑さんの強さの秘密となったという部分をもっと描ければと思う。この番組では、水泳の元アスリートに昔の映像を見てもらい、前畑さんの強さを分析するとともに、アスリートが感じるプレッシャーの大きさも語ってもらうことを考えている。いただいた意見の中で気づかされたのは、人と地域の関わりが、希薄になっている中で、前畑さんと地域の人たちの絆が、社会への一つのメッセージとして残せるのではないかということだ。前畑さんは本当に魅力的な女性で、彼女の生き方を追うことで現在につながるヒントもあると思う。

○　８月１６日(金)の「スーパープレミアム　生中継！京都五山送り火」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ後 6:59～8:59)を見た。送り火を支える人の紹介だけではなく、冷泉家の中にカメラが入り、平安時代から続くお盆の儀式も見られて、とてもよかった。京都市民の送り火の楽しみ方や、病院に入院している京都の子どもたちなど、いろいろな角度から紹介されていて、放送時間は長かったが、おもしろかった。何より天気がよかったので、よかったと思う。

○　連続テレビ小説「なつぞら」をずっと見ている。連続テレビ小説 100 作目ということで「お祭り」のようだが、歴代のヒロインの登場も楽しみにしている。岸川亜矢美の家に住んでいたときのヒロイン・なつの服装を、毎日楽しみにしていた。京都アニメーションの放火事件とも重なったので複雑な思いで見ていたが、ドラマを見ながら作画監督の仕事などアニメーションのことをよく知ることができた。いつも番組を見た後にインターネットで有名な声優が出たことや、原画は有名なアニメーターが書いたということを知り、録画で見直して楽しんでいた。次の連続テレビ小説も期待している。

○　８月１日(木)のＮＨＫスペシャル「香川照之の昆虫“やばいぜ！”」（総合 後 7:57～8:42）を見た。Ｅテレらしい演出の「香川照之の昆虫すごいぜ！」のほか、ブラックユーモアあふれる「植物に学ぶ生存戦略 話す人・山田孝之」のシリーズ化も期待している。

○　７月２５日（木）の「奈良ナビ」の記者リポート「柿でもうかる農業へ」を見た。農家には「儲からない」「休みもない」という悪いイメージがあるが、合理的に経営のやり方を変えてみんなで協力し合ったら、黒字が増えて楽しく取り組めるようにな

ったという趣旨のリポートだった。農家の若い男性たちが並んで話をする場面があったが、その背景に高級車が並んでいるのが見えて、それまでの話がよかっただけに、そのような演出に違和感があった。

○　マラソングランドチャンピオンシップ関連の特集が多く、大変興味深かった。９月８日(日)の「スポーツ×ヒューマン「だから　私は走る～女子マラソン　東京五輪への“一発勝負”～」(ＢＳ１　後 11:00～11:44)を見た。それぞれ３人のアスリートのカラーをしっかり描いている番組でよかった。東京オリンピックの代表はどのスポーツも選ばれた人しか出られないが、この番組は全員心から応援したくなる内容だった。それぞれの選手の個性もしっかり表現されていた。勝った負けたの勝負だけで判断されがちなスポーツの世界だが、それよりも人生すべてをかけて目標に向かう過程の部分を知ることができ、マラソンに興味がない方でも考えさせられる番組だったのではないか。それぞれの合宿地での取材など、長期にわたり細かく取材されたからこそだと思う。これからも来年に向けてこのような番組を楽しみにしている。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０１９年７月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１７日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、８人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、かんさい熱視線「Ｇ２０直前！どうなる大阪サミット」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	篠　　雅廣	（大阪市立美術館　館長）
副委員長	帯野久美子	（関西経済同友会　常任幹事）
委　員	黒木　麻実	（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　関西支部副支部長）
	小林祐梨子	（スポーツコメンテーター）
	鈴木　元子	（杉本や編集処　編集者）
	添田　隆昭	（総本山金剛峯寺執行長・高野山真言宗宗務総長・高野山学園理事長）
	堀江　尚子	（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表理事）
	安井　良則	（大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼　感染管理室室長）

（主な発言）

＜かんさい熱視線「Ｇ２０直前！どうなる大阪サミット」
（総合　６月２１日(金)放送）について＞

○　興味深く番組を見た。番組では扱われていなかったが、２０か国の首脳のうち、Ｇ７以外の１３か国の首脳や、首脳に同行する配偶者たちの動向も知りたいと感じた。

○　非常に充実した、勉強になる番組だった。前半では、交通規制とテロ対策を取り上げていたが、バスダイヤの乱れのほか、コンビニエンスストアの商品供給の遅れなど流通の問題までわかりやすく触れていた。サミットの開催が市民生活にも密接に関わ

っていることがわかり、適度な緊張感を高めるうえでふさわしい内容だったと思う。元警視総監がゲストとして出演しており、議長国の責任の重さを感じた。ゲストの専門的な用語を、伊藤雄彦アナウンサーが私たちにもわかるようなことばで補足していたのはよかったと思う。後半は、サミットそのものに関心を抱かせてくれる内容で、デジタルデータの国際ルールづくりや医療データ活用の未来を議題にしていることが紹介されていた。多くの日本人が、サミットはこうしたことも話題にする会議だと、身近に感じたのではないか。真剣に見れば見るほど、頭を回転させる必要がある内容で、パーソナルデータの定義づけをイラストなどでわかりやすく説明してほしいと思った。会議後、どういう成果が出たのかも、調べてみたいと感じた。

○　Ｇ２０大阪サミットの開催は注目度が高かったが、開催後にあらためて見ても新しい発見のある番組だった。開催直前に、大阪では緊迫感が漂っていたが、一般道の深刻な渋滞やテロの危険性など、懸念されていた問題は回避できた印象だ。番組前半で紹介されていた市民生活への懸念については、よく知っていたが、後半では、会議で何を話し合うかが取り上げられていておもしろかった。特に、デジタルデータの国際ルールづくりについては、少し難しい内容だったが、とてもわかりやすくまとめられていたと思う。パーソナルデータについてなど、問題はあるかもしれないが、医療や車の自動運転や農業の未来に期待できると感じた。職場、地方、医療、恋愛、法という５つの分野で国際ルールを決めるということだが、恋愛の分野について知りたいと感じた。今は婚活パーティーに行かなくても、サイトに自分のプロフィール等を登録すれば、自分に合う人をプログラムが選んでくれるような時代なので、１０年後、２０年後はどんな時代になるのだろうかと、期待半分、不安半分のような気持ちで番組を見た。

○　番組では、テロ対策のことを取り上げていたが、同時多発的な爆弾テロや道路を使ったテロが起こらずに無事終了してよかった。交通規制については、この番組も含め、ＮＨＫが情報発信してくれたことはよかった。心配されていた道路の大渋滞はなく、多くの人たちの協力によるものだと感じたが、メディアの情報発信が大きく貢献していたように思う。安全かつ自由なデジタルデータの国際的な流通については、開催まではいろいろなメディアで取り上げられていて盛り上がっていたように思う。閉幕直後にアメリカのトランプ大統領が韓国に行って板門店で北朝鮮のキム・ジョンウン（金正恩）朝鮮労働党委員長と会ったことに世間の関心がいってしまったからか、実際にどのような合意がなされ宣言が採択されたかについては十分に報じられていないように思う。

○　大阪サミットとはあまり関係のない生活圏にいる人でも大阪サミットのことがわかる番組と期待して見た。冒頭にテロ対策が取り上げられていたので、テロの危険性が印象に残った。一方、大阪サミットでは、どのようなことを議論しているかを知りたいと思いながら、後半パートを見たが、前半と後半のつながりがしっくりこないと感じた。米中貿易摩擦が大きな話題となっていたが、開催地の安全や生活に影響を及ぼしてまで会議を開催する意義が分からなかった。Ｇ２０サミットは、本来、人類共通の経済分野の議題を話し合う会合だと思うので、私たちの生活に負担を与えずにすむヒントのようなものを紹介してくれればよかった。

○　番組前半でドローンによるテロが紹介されており、実際に起きうることと感じたので、テロ対策についても興味深く感じた。一方で、私たちの生活に影響するような大規模な規制をして開催する会議だったが、インターネットを使えば、一堂会さずに話し合うこともできるはずだとも感じた。番組を見て、パーソナルデータの流通がよくも悪くもこれから進んでいくだろうということ、プラスチックごみの話題、「大阪トラック」のことがよく分かった。３０分で会議の内容をすべて解説するのは難しいと思うが、開催前にこのような番組を見ていれば、大阪サミットにもう少し関心を持てたように思う。また、大規模な交通規制を行って、実際にはどの程度の渋滞が起こって、物流に影響があったのか。大都市でこのような大きな会議を行った場合の影響について、会議終了後に検証する番組があれば、今後に役立つように思う。

○　まずはテロも事件も事故もなく無事に終わったことは大きな成果だったと思う。大規模な規制で不便があったにもかかわらず、あまり市民の不満は高まらなかったように思う。ＡＰＥＣが大阪で開催されたときに比べて、今回は大規模な交通規制のことも含め、事前の報道もかなりあったので理解が進んでいたからだと思う。一方、後半のデジタルデータの国際ルールについて、日本はあまり先進的ではないと思うので、新たなルールづくりを進めるのは難しいと思う。ゲストが「パーソナルデータの活用で世界に存在感を示してほしい」と話していたので、結果がどうだったのかということも報道してほしいと思った。会議の成功をはかるうえで、大阪の知名度を上げることも重要だと思うので、「大阪」という都市がどれぐらい世界に紹介されたかということもぜひ知りたいと感じた。今後大阪サミット報道の締めくくりとして、伝えてほしい。

○　３０分の番組の中で、若干詰め込みすぎていると感じた。これから大きなイベントを控える中でのテロ対策や、貿易戦争の中でのデータの管理はいずれも重要な課題だと思う。中国、ＥＵ、アメリカではデータを扱うルールが全く異なる中で、かなり革

新的なルールでないかぎりは、日本が独自のルールを提案するのは少し難しいように感じた。また、大阪駅前は、交通量は 3.4 倍になると紹介されていたが、実際はどうだったのかを知りたいと感じた。

○　大阪サミットを迎えるに当たっての地元の心構えということで、テロ対策や交通規制などの現状の紹介と、大阪サミットで話し合われる中身についての２つの軸があったが、できれば２回に分けて放送してもらえたらよかった。２つのテーマは、それぞれ知っておきたいことで、番組で紹介された内容も時間に制約されている感じがしてもったいないと思った。前半では、交通規制の時間が直前までわからないとしながらも、交通量がわかるグラフなどが作られていたが、画面では詳細が分かりにくく、視聴者には実用的ではなかった。また、後半の日本が提案するデジタルデータの国際ルールづくりについては、京都の大学や会社の事例が紹介されていたが、これだけで３０分ぐらいの内容があると思ったので、もったいないと感じた。番組自体はきちんと取材されていて、中身もわかりやすかったからこそ、１回にまとめなくてもと残念に思った。

○　これだけの規模の国際会議の舞台となった大阪にあって、報道機関として、さまざまな準備やオペレーションに取り組まれた苦労に感謝したい。番組内では、「警備関連の話題」と「デジタルデータの国際ルールづくり」という２つのテーマが取り上げられていたが、その点に少々違和感を覚えた。どちらかのテーマに絞り込んで、より深く掘り下げて取り上げていたらよかったと思う。また、出演していたゲストが原稿を棒読みしていたのが気になった。事情が分からない人間からすると、放送局側が用意した原稿を読まされているだけと誤解を受けるような気がした。

○　今回の大阪サミットに関して、仕事や日常生活への影響が気になっていたので、会議の重要な課題が何であるのか、この番組で初めて知った。開催前にこのような番組が繰り返し放送されていれば、もっと多くの国民が関心をもっていたように思う。未来の生活を変えるかもしれないＡＩ技術の革新、その基盤となるデジタルデータを、国境を越えて取り引きするためのルールづくりを日本が課題として提案している。米中貿易摩擦のまっただ中で、さまざまな国際商取引や政治的バランスのカオスの中、日本が責任ある主導権をとれるのか心配になった。もっと他国は商用利用、政治的かつ戦略的な具体的なプランを隠して交渉に臨んでいるのではと思ったが、番組の中で「データの管理方法は、米国は民間の裁量まかせ、ロシア・中国は国家管理、ＥＵは地域外への持出禁止」という説明がよくわかった。それとは別に番組の冒頭に大阪サミット開催に関する課題が語られたが、この後の大がかりなサミット、オリンピック

にむけて考えさせられることが多かった。テロ対策は日本では警察のみがやるのか、それとも自衛隊などに役割をあらかじめ振りあてることは難しいのかと思った。交通に関しては、総量を減らすことがベストの選択だということはよくわかったが、Ｇ２０は参加国がどの国でもはたして開催可能なのだろうか。そして今後のためにも開催国のメリットがもっとくわしく知りたいと思った。

（ＮＨＫ側）

ビッグイベントをテーマに番組を制作するときには、制作スタッフは、たくさんある切り口の中から選択して制作している。詰め込みすぎという面があったとの指摘は今後の参考にしたい。

（ＮＨＫ側）

議論が多岐にわたる今回のサミットだったが、番組で何を取り上げるかは非常に難しく、２回に分けて放送する手法もあったかもしれない。また、大阪という大都市開催のケースだったので、多くの世界の要人をどのように迎えて送り出すかという点を重点的に取材した。各国首脳や同行する配偶者たちの、各地への訪問なども取材できるかどうか、数年後のＧ７に向けて検討していきたい。

（ＮＨＫ側）

今回、どのようなテーマにするかを議論した結果、テロ対策や交通渋滞という市民への影響と、会議の中身と、大きく２つを取り上げることにしたが、３０分の番組で紹介しきれなかった部分もあったかもしれない。データ流通の話題については会議の中身が概要にとどまっていた段階での取材で、映像的な表現も非常に難しかったが、好評意見をいただけたので、チャレンジしてよかったと思う。大阪サミットの結果、どうなったのかを知りたいという意見もあったが、今回のサミットでは、これから実務的な会議を今後本格的に繰り返し行っていくうえでのスタンスが決まったにすぎない。今後データ流通のあり方が変わるのか、どこまで進むのかについては、日本の動きにかぎらず、ヨーロッパ、アメリカの動きも含めて継続して取材していきたい。また、交通量の増加については、大阪駅前のピンポイントのデータはなく、通常時の交通量をもとに予想したシミュレーションほどは、渋滞が起きなかったと聞いている。

＜放送番組一般について＞

○　６月１２日(水)の歴史秘話ヒストリア「物語に魅せられて　更級日記・平安少女の秘密」を見て、知らないことばかりでおもしろかった。同じく平安時代の作品である「源氏物語」や「枕草子」に比べて少し地味なイメージがあるが、作者の菅原孝標の娘の幼少期の回想録という形で描かれたということで、大変興味を持って見ることができた。本が簡単に手に入るわけではない時代に物語を読みたいと田舎で思っていた少女時代、京に上って手にした「源氏物語」に熱中する姿などは大変おもしろく、演じる俳優も上手だと思った。宮中に出仕して政治的な野心も持ったことも意外に感じて、物語が大好きだった夢見る少女から随分変わってしまったという印象を受けた。また、紫式部の「源氏物語」が大変好きだったようだが、実際に宮中で会うことはなかったのかと想像した。作品や研究者の意見を紹介しながら、人物像を明らかにしていく「歴史秘話ヒストリア」をよく見ているが、今回のように、本名も生没年も明らかではない女性が、どのような人物で、どのような生涯を送ったのか。歴史や国語の教科書ではわからない部分を深く伝えていて、大変よかったと思う。自宅に原文の「更級日記」があるが、あらためて読み返そうと思った。

○　番組を見始めたときは興味がなかったが、本当におもしろかった。俳優が演じる明るい「オタク」像が最高で、菅原孝標の娘が１０歳で「源氏物語がおもしろい」と食いつくオタクぶりが、印象に残った。解説している大学の先生たちも好きなことを続けてきた「オタク」的な面もあると感じられ、普通の人には読めないひらがなを説明する姿が輝いていて、番組全体が「オタク」の世界で彩られていた。一方で、主人公には、悲しいこともたくさんあり、最後に自分の人生を振り返り、生き直しという形で物語をまとめたということで、とても勇気をもらえる番組だった。出演していた作家の江國香織さんのコメントも、ひと言ひと言が心に響き、とてもよかった。

○　平安時代に書かれた「土佐日記」「和泉式部日記」「蜻蛉日記」などとともに、「更級日記」も記憶にはあり、作者の名前も番組を見て思い出した。作品の内容は全く知らず、今回の番組で初めて知ることばかりだった。また、ひらがなの確立や藤原氏の摂関政治が、女流文学の隆盛を招き、1,000 年前の平安時代の人々の暮らしや、心の動きを今に伝えているということを、再確認した。「源氏物語」は現代に至るまで日本の文学に大きな影響を与え続けていて、多くの言語に翻訳されて世界中で親しまれているが、「源氏物語」が世に出てまだ間もない平安時代には、貴族の子女の間では大変な話題で、菅原孝標の娘のように憧れ続けていた人も少なからずいたものと思う。番組では「更級日記」は１人の女性の少女の時代から晩年に至るまでを回想した唯一

の作品であると言っていた。この時代に物語文化に憧れた少女は、その才能によって宮中に仕え、当時の下級貴族では自分の一族や夫の出世が自分の肩にかかってくることを知り、それでも前を向いて進んで行こうとした。その後どうしようもない現実に直面し、孤独の中で昔を懐かしみ、作品を書くという姿は、現代に生きる多くの人たちにとって共感できるものだと感じた。「散る花も　また来む春は　見もやせむ　やがて別れし　人ぞ恋しき」という歌は、私の心にもしみる気がした。

○　見れば見るほど歴史が好きになり、歴史上の人物に愛着が湧く番組だ。特に今回は、歴史的な紹介にとどまらず、専門家を含め、番組に登場する人たちは菅原孝標の娘に愛着を持っていることが伝わってきた。菅原孝標の娘は、千葉で生まれ育ち、京で３３歳のときに結婚し、出産もして、夫は長野に単身赴任したこともあり、現代人の人生ストーリーのようで驚いた。夫の橘俊通が亡くなったことがきっかけとなり、夢と現実を振り返って、５３歳で「更級日記」を書き上げたのだろうか。そのときの思いはどうだったのか、いろいろと想像をした。一人の女性のひたむきさや素直さ、こういう人と結婚したいという少女時代のあこがれなどには、親近感がわいた。膨大な量の「源氏物語」を暗記するという、マニアな一面もあって、５０分の番組があっという間のおもしろい番組だった。３つのエピソードの構成も、非常によかったと思う。

○　本当に楽しい番組だった。「更級日記」は通して読んだことがなく、おおまかな内容を初めて知った。高校の日本史の授業で、作者が「菅原孝標女」であることを知り、本人の名前でないことに驚いた。番組では「菅原孝標の娘」という表記だったので、名前の表記が変わったことについて知りたいと思った。少女時代を演じる俳優が、最初は１０歳には見えないと思ったが、京に上る時の年齢は非常に合うと感じた。本当にかわいくて、演技が上手で、その勢いのまま後半まで見られたような気がした。ドラマの部分も、それを補う専門家の解説もとてもわかりやすかった。再現ドラマをもう１回再生しながら、同じ画面の中で、専門家の解説をかぶせる演出はよいと思った。再現ドラマを中断し、専門家の解説が続くと、チャンネルを変えてしまうと思うが、違和感なく見られた。作品では執筆歴を封印したことについて、物語を出世の道具に使ってしまったことを悔いて書かなかったという話だったが、悔しくて大嘗会の行列を見に行かなかったという話もあったので、むしろ悔しさやプライドの高さで、あえて書きたくもなかったのかと思う。その解釈が番組に出演した専門家の見解なのか、学会全体の見解なのか、知りたいと思った。

○　高校の古典の先生が平安女流文学の専門家で、情熱を込めて教えてもらったことを思い出した。「更級日記」は、現代に通ずる話だと思った。菅原孝標の娘がさまざま

な体験を経て、いろいろな失意の中でもう一回その物語を見直して、改めて物語作家として生きていこうと思ったという話だが、物語の持つある種の力を再認識しようという意図のもとに、この番組が作られたのかと思った。一方、なぜ今「更級日記」なのかということはよくわからなかった。高校の授業では、作者どうしが親せきである「更級日記」と「蜻蛉日記」をいつも一緒に取り上げていたが、今度は「蜻蛉日記」も取り上げてほしいと思う。

○　タイトルを見ただけでとてもワクワクした。当番組のテーマは戦や男性中心のものが多いと思うが、平安時代・奈良時代のことや女性のこと、宮中の生活がかいま見られるのではないかと期待した。女性が当時、「ものがたりのかみ」としてたくさん登用されていたことは大きな発見で、女性も実力しだいで、家族も出世していく力を発揮できたということだ。また、３２歳で家の主というのも、その後の封建社会では難しかったと思うので、平安時代のおおらかさを感じて心が和んだ。物語に憧れ、それを出世の道具にしたために、非常に後悔する人生を送った主人公が、失意の中でも自分の生きた時間を書くことで振り返るという、１人の女性の生々しい人生が込められている「更級日記」を読んでみたいと思った。ただ、それは解説を聞いたからわかることで、その点でもよい番組だったと思う。少し気になったのは、１０歳の主人公が明るく子どもらしかったことで、当時の平均寿命や社会的背景から考えると、もう少し大人らしい振る舞いだったのではないか。また「義理の母が離婚した」というコメントがあったが、平安の初期は母系社会だったと思うので、「離婚」という表現はふさわしいか疑問に思った。もう少し時代背景をきちんととらえた演出にしたほうがよかったように思う。テーマとしておもしろかったので、こうした番組を今後も続けてほしい。

○　２０代のときに「更級日記」を読んでとてもおもしろかったが、この番組を見て、あらためてそのおもしろさがわかった。「更級日記」は晩年に書きつづった回想録だと知ったが、人はそれぞれ物語を生きており、自分の過去を振り返りながら生き直すという面はあるので、そうした意味で興味深かった。学習院女子大学教授の伊藤守幸さんと早稲田大学教授の福家俊幸さんの思い入れは強く、主人公の心の変化に応じた丁寧な解説は、とても心に染み入った。主人公が「物語ってすごい！」と言っていたが、生きるうえで物語を必要としていることに感銘を受けた。めのとを見舞いに行って、２人でお互いの心情を思いやる場面には、胸が詰まる思いがした。１つ気になったのは、案内役の渡邉佐和子アナウンサーのコメントにエコーがかかっていたが、エ

コーはなくてもよかったのではないか。また、日本人はＳＮＳやブログを書くことが非常に好きで、その原型が平安時代に出てきているように思う。日記に対する特異な考え方にも触れると、現代的な解釈と意義が出てきたかもしれないし、おもしろかったと思う。

○　「更級日記」の作者が出世の道具として物語を作っていたこと、後に書いた「浜松中納言物語」が後世の三島由紀夫にまで影響を与えていたことも知らなかった。この番組の内容自体が新鮮でおもしろかった。みずみずしい感性や、純粋な心が映し出された少女時代を中心に、ドラマ仕立てになっていたことも含めて、作者の人生がわかりやすかった。ただ、「更級日記」自体を改めて簡単にまとめて紹介するパートが、番組後半でもよかったのではと思った。「当時の作品で、具体的な数字が書かれているのは珍しい」など、途中に挿入されていた解説も、より効果的になるのではないかと思った。また、主人公の住居のあった場所の解説部分が興味深かったが、三条防門小路を「現在はこんな広い通りですが」ではなく、きちんと御池通と名称を紹介した方がわかりやすいと思った。最後に 1,000 年前も現在も、女性の同じような人生ストーリーはあるのだとタイトルを見ただけではわからない「おもしろさ」も感じられた。

○　何度かこの番組を見てきたが、今回はとてもよかったと思う。「更級日記」をまだ読んだことはなく、菅原孝標の娘がつづったものであること、そして、源氏物語の感想を初めて記した人と知り、驚いた。平安の世を確かに生きた一人の女性の息づかいを感じる貴重な日記。それを生み出したさまざまな背景、人としての成長と挫折。短い時間の中にまとめ上げられ、心に響いた。特にエンディングに近いところで「更級日記」と名付けられたいわれに引きつけられた。能役者の最奥の演目に「姥捨」という曲があるが、「我が心　なぐさめかねつ　更科や　姥捨て山に照る月をみて」という古歌から出来上がっている。晩年の主人公が１０代のころからおよそ４０年間の思い出話を書きつづり、心を慰めたという話だ。「更級日記」という作品名が、切なく胸に響いた。欲を言うと、更科の里の夜の風景、それも一等さみしく静かな映像がほしいと思った。

○　今回の番組を見てまず思ったのは、人が生を受け、さまざまな出会いや別れを繰り返し、その生涯を全うしていく過程の中で起こる心象風景は 1,000 年経っても変わらないものだということだ。しかし、主人公は同時代に生きた他の女性たちとは違う点があった。少女のころに出会った「源氏物語」の存在が、彼女のその後の人生を決定的に変えていった。文学の鑑賞者から執筆者へと転じた彼女は「更級日記」という名の作品を通じて、自身の心の様相、物語を未来永劫に残すことに成功した。この事

実は現代に生きるわれわれにも重要な示唆を与えてくれているものだ。まわりの大人が子どもの持つ無限の可能性を摘み取らずに、その発達を支援することの重要性を教えてくれているからだ。この番組は時折見るが、さまざまな資料や史実を丹念に収集分析し、見応えのあるコンテンツとしてまとめ上げられる制作力はＮＨＫの真骨頂だと思う。

（ＮＨＫ側）

「歴史秘話ヒストリア」は、毎回それぞれねらいを持って制作している。今回は、菅原孝標の娘の人生にしっかりとフォーカスを当てることで、われわれに通じる思いや教訓や共感があるという思いで作った。委員からいただいた意見から、そうした根本をしっかりと伝えることができたように感じた。

（ＮＨＫ側）

「歴史秘話ヒストリア」は、政治史を取り上げることが多いが、今回はどのような部分に共感してもらえるかと考えたときに、主人公は現代人の感覚と近い部分があるのではないかと思った。物語に愛着を持っていた女性が、結婚してキャリアウーマンになって、夢を見るが挫折をして、それを振り返ったときに、とても大切にしていた物語に立ち返るという話で、今でもありそうな人生に共感してもらうことが、今回の番組の軸になるのではないかと思った。作者の表記についてだが、教科書での表記とは違うが、分かりやすさを優先して「菅原孝標の娘」とした。もう一つは、執筆歴を隠したのがどういう理由だったかについては、学会の定説というよりは、福家教授と伊藤教授の説を採用した。「どうして今、更級日記なのかわからなかった」という指摘だが、現代を生きる人たちが見ても主人公の生き方に共感できる部分があったのであれば、今、放送する意味があったのではないかと思う。主人公のことばづかいやしぐさについては、いつもよりあえてやや現代に近づけている。その点に違和感を覚える視聴者もいるとは思ったが、今回は、共感が得られるよう、ある程度、現代に近づけようとした結果だ。また、離婚という表現については、文献で「義理の母は家を出た」と書かれており、現代的な意味では離婚という形にあたると思うが、表現については今後も注意を払いたい。「コメントにエコーがかかっていなくてもよいのではないか」という指摘については、ス

タジオ部分を不思議な雰囲気にするために長年行ってきた演出だが、今後の参考にしたい。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０１９年６月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１９日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、８人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、ルソンの壺～５月号～「仕掛けを作って新たな市場を創り出せ！」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	篠　　雅廣	（大阪市立美術館　館長）
副委員長	帯野久美子	（関西経済同友会　常任幹事）
委　員	小林祐梨子	（スポーツコメンテーター）
	鈴木　元子	（月刊大和路ならら　編集長）
	添田　隆昭	（総本山金剛峯寺執行長・高野山真言宗宗務総長・高野山学園理事長）
	堀江　尚子	（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト代表理事）
	矢崎　和彦	（(株)フェリシモ　代表取締役社長）
	安井　良則	（大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼感染管理室室長）
	山舗　恵子	（京都リビング新聞社　編集部長）

（主な発言）

＜ルソンの壺～５月号～「仕掛けを作って新たな市場を創り出せ！」
（総合　５月２６日(木) 放送）について＞

○　人と人のつながりが希薄な社会において、企業が、コーヒーを通じて問題を解決しようとしていることを知り、うれしくなった。中学校では、子どもたちがキャリア教育の一環として、職場体験をしているが、まずはこの番組を見せたいと感じた。「会議は３０分以内にする」という事例も、私たちの生活に生かせると思った。この番組をより多くの人に見てもらいたいと思うが、私の同世代の人たちは、新聞のラテ欄をチェックしないので、ＳＮＳを通じて番組を紹介すれば広がるのではないか。

○　「ルソンの壺」は時折見ている。今回のテーマは、会社経営の視点から見て、とても興味深く感じた。事例がとてもおもしろく、切り取り方によってさらに響く内容になると思うので、小説家の真山仁さんに加えてもう１人コメンテーターがいてもいいように思った。外資系食品メーカー日本法人の社長の「今の新しい現実から問題を発見して、自社の領域で解決策を探す」という姿勢は、事業の本質だと思った。全社員で、顧客が抱える新たな課題を探し、自社商品で解決案を示す企画を考える「イノベーションアワード」が、社内で制度化されて、風土として根づき、イノベーションが断続的に出てくるということは大いに参考になった。奈良の衣料品の縫製工場が立ち上げたビジネスについては、繊維産業が空洞化する中、シェアリング・エコノミーのような発想を取り込んでいて意義深いと思った。現在、第４次ベンチャーブームといわれる中、新しい人たちが次々と起業し、既存の企業も変革に取り組んでいる。関西には、おもしろい事業者がたくさんいると思うので、いろいろな人たちを取り上げてほしい。

○　オフィスをターゲットに、顧客をアンバサダーに任命して、人件費も場所代も無料で、マシンの費用だけで新しい市場開拓していくというのは、当時は非常に斬新な発想だったと思う。会議の時間短縮の取り組みを見て、自分自身も気をつけたいと思った。奈良の衣料品の製造加工会社が、国内の縫製工場の衰退で仕事を失った「潜在縫製士」を掘り起こし、縫製を依頼したい人とつなげていて、すばらしいと思った。実家が縫製工場だった社長の、職人への愛情がにじみ出ていて、より多くの縫製職人たちとつながっていってほしいと思った。今回紹介された企業はどちらも、イノベーションを起こすためにＩＴを使って、垣根を越えて人と人、人と企業をつなげているとまとめられていた。自分自身も知見や技術を地域社会に役立てていくことが、今後問われていくことになると思うので、垣根を越えた人と人とのつながりが重要になっていくとも思った。

○　この番組で、外資系食品メーカーの日本法人の本社が神戸にあることを知ったが、アンバサダーの仕掛けをわかりやすく伝えていたと思う。この番組は、ビジネスに携わっていない自分でもエールをもらえる番組で、すぐにまねできることがあると感じた。会社の試みもためになるが、それ以上に会社組織のイメージを覆されるような社長の考えに感銘を受けた。考える時間は仕事持間全体の７％に過ぎないことにまず驚いた。一般的に、多くの会社は上から言われていることを目標にしている会社が多いと思うが、社員たちがみずから本気で考えて取り組む姿勢が評価される仕組みは、社員のモチベーションを上げると思った。また、ベンチャーコーナーでは、２０代から８０代の職人がつながり助け合っている姿が描かれていて、印象深く感じた。後継者

問題や、安価なものが求められる時代に一流の職人が評価されないという問題に気づいた社長が、２６歳で起業したことに刺激を受けた。仕事をしているかどうかにかかわらず、多くの人が見るべき番組だと感じたので、どうしたら見てもらえるだろうかと思った。

○　かつてこのコーヒーのアンバサダー制度は憧れだったが諦めたという経緯があり、この番組で制度の着想を知ることができておもしろかった。これまで世界中で行われていると思っていたが、日本独自ということに驚いた。アンバサダーが続くモチベーションは感謝されるということで、日本人の感覚にあった制度だと感じた。組織に身を置くものとして、社内の制度や会議の進め方は非常に気になるが、「イノベーションアワード」で金賞をとった企画が次年度の経営戦略になると明確にしていることが社員のやる気を引き出すと思った。一方で、知りたいと思ったのは失敗事例で、企画は通ったがうまくいかなかったことも紹介されていれば、より身近に感じられると思った。衣料品の製造加工を行う会社については、社長が縫製職人の高い技術に誇りを持っていて、頑張っていると感じた。起業して数年の企業でこれからだと思うが、自由で柔軟性のある発想がよかったので、引き続き取材してほしい。

○　チョコレート菓子を使った受験生応援キャンペーンをはじめ、話題に尽きない会社のツボがいくつも紹介されていて、とてもおもしろかった。社員のやる気を引き出すものとして「イノベーションアワード」の仕組みはすばらしいと感じた。賞金はもちろんだが、社員が事業を進めて検証したうえで企画を提案するということが、本気で取り組むポイントになると思った。アンバサダーが始まった背景に、ＩＴ化によるコミュニケーション不足があると知り、オフィスに目をつけただけでなく、時代をうまくつかんだ結果、うまれたものだと感心した。アンバサダーの人たちは「感謝されるのがうれしいから続けられる」という話が出てきたが、アンバサダー本人の声も聞けたらよかった。また、衣料品の製造加工を行う会社の２９歳の社長の「職人の技術に適正な価値をつけたい」という発想はすばらしいと思った。私の地元には伝統産業がたくさんあるが、後継者がいなくなっている。このような新しい発想を持つ２０代の社長がもっと出てきたら伝統技術は残っていけると感じられたので、引き続き紹介してほしい。また、職人が喜びを感じながらいいものを作ることは本当にいいことだと感じた。時代を背景にして新商品を開発する会社と、古くからの職人の技術をメインに勝負をしていくという会社と、全然違うものが一緒に紹介されていて、とてもおもしろい番組だった。

○　駅のプラットホームの空き店舗を再利用したカフェができたきっかけは、社員の方

が駅のプラットホームで人びとが会話をしていないことから着想を得たことを番組で知ったので、電車に乗るときなども、注意深く周囲に目を配ることは大事だと思った。一方、縫製職人の事例だが、仕事で必要とする衣服や道具は職人の手で作られているものも多く、職人の高齢化によって技術の継承が難しくなってきている。後継者不足の問題を抱える職人のことについて、別の面からも取り上げてほしい。

○　顧客の問題を発見するという意味で、とても共感する部分があった。コミュニケーションを図るために、コーヒーを入れて心地よい空間を作るという発想は、新しい視点だと思った。また、知恵を出すための時間作りとして「会議時間は３０分以内、資料３枚まで」という明確なポリシーはよかった。一方で、成功に至るまで失敗はたくさんあったと思うので、失敗事例も紹介されているとよかったと思う。また、衣料品の製造加工会社の事例は、人と人を結び、場所や時間を問わず、職人が働きたいだけ力を発揮する新しい働き方だと感じた。ＩＴ技術を通じて、スモールビジネスが地方で育っていくことが地方創生につながると思うので、ぜひこうした事例をもっと紹介してほしい。

○　昔読んだ本の中に「問題の解決は問題の提出とともにある」と書かれていたが、外資系食品会社の社長の話から、ビジネスの世界でも同様のことだとわかり、感銘を受けた。また、社長が「お茶くみの仕事をするように言われると嫌だと思うが、アンバサダーは社内の人に感謝されるので続けられる」と話していた。アンバサダーとお茶くみを結びつけて話をするのは少し飛躍しすぎだと感じた。また、スタジオセットで、出演者４人が座るテーブルの向かいに誰も座っていないいすが置いてあるのは不思議に感じた。奈良の事例は、掘り起こされた職人は、単純に仕事を得るというだけでなく、自分の人生も認められるという意味で励みになっていると思う。ベテランの職人が「ミシンにきょうもよろしくお願いします。これがなかったら仕事になりません」と話していたが、道具に感謝しながら働く日本人の在り方に感銘を受けた。

○　今回は外資系食品メーカーの話題で、2000 年ごろから家庭でのコーヒーの消費が減少したが、外資系のため、海外展開することができず、発想転換として社内で「イノベーションアワード」がはかられたと知った。皆で気づかぬ問題を発見することが新ビジネスを生む。全社をあげてそのシステムをつくりあげる努力は並大抵ではなかっただろうと思った。アンバサダーの仕組みが、今回はじめてわかり、個人的に少しうれしく感じた。そしてアンバサダーがつき動かされる動機が「自分がそうしたいから他人にもしてあげたいと思う。そして、それによってありがとうと皆に言われることに喜びを感じた」からということで、これがビジネスチャンスになるとは正直驚き

だった。私にとってはベンチャー企業コーナーが印象的で、仕事のない縫製士を「潜在縫製士」として探し出してネットワーク化してつなぐ。不況にあえぐ繊維産業にとって、手ごたえのある有効な方法であると思った。京都西陣では昔、悉皆屋(しっかいや)というのがいたと聞く。今でこそ悉皆というと、シミ抜きなどの着物のメンテナンスの仕事と思うが、以前は発注元の好みを聞き、織元、染め職、金銀箔、縫い職、仕立て、デザイン職などをかけ回り、一つの製品になるまでを請け負うコーディネーターだったと聞く。そんな時代に戻っていっていることに正直驚いている。

（ＮＨＫ側）

この番組は１３年目を迎える番組で、今年度、音楽やセットのリニューアルに加え、現役世代にも見てもらえる内容を目指している。経営目線の改革などの話が多くなりがちだが、「わが社の働く知恵」というコーナーを設けて、会議の進め方など、あすから仕事に役立つ話も入れている。また、今回でいえば、アンバサダー制度の成功の秘密を紹介したうえで、企業が次はどのような一手を歩もうとしているのかをスタジオでのプレゼンテーションを交えて紹介し、関西の企業の過去、現在、未来を見ていこうとしている。さらに、メインのコーナーとは別に、ベンチャー企業コーナーを設け、歴史が浅くてもすばらしい仕事をしている企業も紹介している。委員からいただいた意見を制作スタッフと共有し、今後の制作に生かしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　５月１６日(木)、２３日(木)のバリバラ「スケッチコメディー～障害者が職場にやってきた～」（前編）（後編）を見た。聴覚障害のある社員が「うちの資料を持ってきて」という上司の指示をうまく聞き取れず、「牛の肥料」を持ってきて、不快なにおいを発するという話があった。牛を育てる酪農家の方が見ていたら、肥料のにおいを黄色い煙で、あたかも不潔なもののように表現していることを不快に感じたのではないかと思う。

○　「バリバラ」は、問題に正面から切り込んでいく番組で、今回も気負わず、見ることができてよかった。ドラマを見て、当たらず触らずという時代ではないという強いメッセージを感じた。自分の頭で考えるよりも、バラエティーやドラマ仕立てになっ

ているほうが見やすいし、そうした光景を実際に見ると、すっと頭に入ってきてよかったと思う。実際、ドラマの中の部長のような人はたくさんおり、客観的に見られたのがとてもよかったと思う。障害者が気を遣われることへのつらさをなんとなく分かっていたが、特に前編からは気づかされることがたくさんあった。車いすや視覚障害者の白い杖の体験をしていたが、スタジオのコメンテーターが「障害者はやめることができないから、本当の気持ちはわからない」とコメントをしていたが、まったく知らないよりは体験したほうがいいと思うし、考えるきっかけになればいいと思う。最後のミュージカルの演出はいらないかとも思ったが、気軽に見られるためのものではないかとも感じた。これから障害のある人と働く機会も増える中、席の位置関係や、どのくらいはっきり伝えればいいのかという問題など、気をつけないといけないことが散りばめられていてよかった。スタジオで「深刻な問題ほど、バラエティーとして取り上げられるといい」というコメントもあったが、本当にそのとおりだと思う。ただ、「三流会社バリバラ商事」の「三流会社」はいらないと感じた。

○　オーソドックスなコメディーの中に、障害者と健常者が仕事をしていくうえで必ず出てくるような問題をうまく織り交ぜていて、本当に楽しく見ることができた。特に、完全なる教育ドラマではなく、お色気や笑いの要素もあってよかったと思う。ミュージカルの演出は、展開としてアクセントが必要だったのかとも思ったが、楽しく作っていることが伝わってきた。私自身障害のある方と仕事をする際に、初めのうちは気遣いし過ぎるところはあったので、フルタチ部長のふるまいにはうなずけるものがあった。番組を見るまではおっくうに感じるかもしれないが、障害のある方とつきあいのある人は少ないと思うので、非常に参考になる番組ではないか。障害のある人だけではなく、さまざまな病気や家庭の事情を抱える人たちとつきあううえでのヒントも十分にあったように思う。

○　前編、後編ともにおもしろかったが、発達障害、身体障害など、さまざまな障害のある出演者が演技をしていて、その演技力にまず驚いた。また、ドラマの出演者がスタジオでもコメントしてくれるので見やすく感じられた。最近では、視覚障害があっても、メールや仕事も支障なくする方も多いが、なかなか仕事が決まらなかったり、できる仕事は限られているという人もいたりするので、とても勉強になるドラマだと思った。障害者は健常者に対して遠慮している部分もあるかもしれないが、このドラマに出てくる障害者たちは自分の意思をしっかりと伝える場面が多くて、みんなで理解しようとする姿が描かれていてよかった。特に、部長のキャラクターがツボにはまり、悪い人ではないが、こういう人はいると思った。子どもからお年寄りまで幅広く見てもらえるようなドラマだと思ったが、現実でもこうした企業があれば紹介してほ

しいと思った。

○　「バリバラ」は、障害のある方への愛情をベースに、辛くなるようなことも明るく表現していて、障害者自立の精神を貫いていることにも感心している。今回は、障害者が職場にやってきた場合に起こることや注意しなければならないことをコントにして紹介していた。前編の「車いす女子目線」のあと、コメンテーターの玉木幸則さんの「車いすに乗って大変だというだけでは、車いす生活の方に共感することはできない」という発言はそのとおりだと思うが、「まずは自分で体験してみる」という猪狩ともかさんのことばもそのとおりだと思う。ドラマに登場する健常者は、多彩な役柄で、深刻になりがちなテーマも明るく伝えていく番組のコンセプトにマッチしていた。特に後編の「職場インザダーク」は、部長が目隠しをして白い杖をついて職場まで歩いていく様子を、全盲の社員が解説していて楽しかったが、今度白い杖を持っている人が困っているところを見かけたら、できるかぎり声をかけようと思った。「業務効率化について」の３文字縛りはよくわからなかったが、発達障害の人は、耳から入ってくる情報の処理が苦手な人が多いため、口頭での指示は簡素化すべきであるということではないかと思った。これについて部長さんも「なるほど。よくわからないけどさすがサポートマンだ」と言っていたが、その後の説明がなかったので、もう少しわかるようにして説明してほしかったと思う。今回の番組では、障害者の方々が明るく生き生きと演技する姿が印象的で、昨年４月に事故にあって車いすに乗って復帰した下半身付随となった猪狩さんが、堂々と演じていたことに感動し、「バリバラ」の前進していく力を改めて感じた。

○　コントのスタイルをとっていたので、とても見やすかった。もし同じような状況になったら部長のようなことしかできないだろうと思ったし、理解も深まったと思う。出演者が明るく楽しそうに演技していたので、深刻にならずに見ることができたと思う。私自身、イベントで車いすの大変さを体験したことがあるが、車いすに乗ってる人が私をむしろエスコートしてくれた。また、大きな会場を真っ暗闇にして盲目体験をする有名なイベントでは、盲目の人たちが瓶を開けて飲み物をついでくれる経験をして、自分の価値観が反転した。障害者は、健常者から見て欠けているものがある一方で、超人的な才能を持つ人もたくさんいる。例えば、ＮＨＫがバリバラフェスティバルとして、希望する視聴者にいろいろな体験をしてもらう「場」を作ることで、番組にかける思いが、より広く伝わるかと思う。

○　実生活に生かせる、見られてよかったと思える番組だった。まず、「車いす女子目線」のコントで車いすの体験をする場面が本当によかった。過去に大型ショッピング

センターで車いす体験をするというプログラムに参加したことがある。子どもにとってはゲーム感覚だが、エレベーターに大きい鏡がついているのは車いすがバックしやすいようにしていることや、車いすでも店内の棚が届くし、道もすれ違えるように配置が工夫されていることに気づいた。今回、この番組を見て、この取り組みを自分でも行おうと動き始めている。また、「面接」のコントで、「私のトリセツ」というものが出てきたが、番組を見た翌日、仕事で相談に乗った際に、「私のトリセツ」を作ってみてはどうかと提案したところ、とても感謝されることがあった。障害の有無にかぎらず、誰もがトリセツを持っていて、人間関係で思いどおりにならないときに、お互いの特性を理解できたら、全部解決するのではないかと思う。この番組で、車いす体験と「私のトリセツ」を見て、すぐにアクションにつなげられたので、すごい番組だと思った。

○　最初のエピソードで、障害者の方を助けたいけどどうしたらいいかわからないというのがほとんどの人だと思う。自然に寄り添えるかどうかは経験値によるものだと思うので、できるだけ若いうちに障害者と過ごす経験をすることが大切だと思う。ドラマにも出てきた車いすの大変さは体験してみないとわからないので、東京オリンピック・パラリンピック、大阪万博を機に、バリアフリーな環境が整備できればと思う。「面接」のコントのように、発達障害の人たちについては、できることとできないことを把握して、雇用していくことが大切だと思う。すでに雇用が進んでいる企業では、この人たちにどうすれば能力を発揮してもらえるか、どのように人事評価をするかを考える必要がある。社会全体が考えていかないと、障害者の雇用率も上がらないのではないかと感じた。番組の演出はおしゃれで明るくて、とてもよかったと思う。ミュージカル風の演出は意見が分かれると思うが、それなりにおもしろかったと思う。これからパラリンピックに関心が高まっていくと思うが、支援学校の教員や生徒たちも障害者スポーツのことをほとんど知らない。パラリンピックだけでなく、さまざまな障害者スポーツのことも番組で取り上げてほしい。

○　協働を実現できるかどうかは、受け入れる側の問題で、障害者とは社会が生み出していることのように思うので、非常に啓発される番組だと感じた。社員コジマが視覚障害者に右腕を貸して案内する様子を見て、歩行速度が速いように感じた。「三流企業バリバラ商事」と紹介していたが、企業が三流かどうかは、周りからの評価なので、わざわざ三流企業を付ける必要はあるのだろうか。また、車いす体験の場面で、タイトスカートをはいている女性がしゃがんで物を取っているところを、部長が見ている場面は少しやりすぎかと思った。スカートやハイヒールを強制するかどうかが問題になっている今の社会のあり方から考えると、バラエティーとはいえどうかと感じた。

○　前編、後編とも見やすかった。あらためて「障害のある人も、無い人もフラットに社会の構成員だ。もっと普通に混ざりあって生きているんだ。上下左右はもちろんなく、対立するような関係ではないはずだ…」ということばにならぬメッセージを聞いた気がした。今回のスケッチコメディーでは、障害者になって１年という女性が自身の体験をもとに、新入社員としてぶつかるであろう問題を次々と提起していたが、この女性の明るさと、取り組みに心を動かされた。番組は、ダメ部長が、しっかり者の女性社員に次々と失敗をさらけ出してしまう形で展開するもので、障害のある人に対する社会的な取り組み、アイデアも発信している。しかしそれ以上に大切だと発信しているのは、障害者の気持ちだった。特にドラマの合間にドラマの出演者と司会者のディスカッションがあり、根底にはこういう気持ちがあるのかとたびたび納得させられた。できた社員のコジマにダウン症のアベ社員がなんとかお礼の気持ちを伝えようとする場面があった。対応は優秀ながらどこかさめたコジマに、素の感情を引き出させるお礼のシーンはとてもよかったと思う。障害者への対応はマニュアル化しないで、その場その場で会話を重ねて気持ちで解決していくことが大切だということを伝えているように感じた。

（ＮＨＫ側）

「バリバラ」は、限られた予算の中で、毎回思い切った演出を心がけている。その中で賛否両論分かれるような演出もいくつかあったかもしれないが、その点に関してスタッフ間で共有しながら、より「バリバラ」らしい表現を求めていきたいと思う。

（ＮＨＫ側）

「楽しく気負わず見られた」ということばをとてもうれしく感じた。この番組を作るきっかけは、2018 年の８月に中央省庁の８割に当たる行政機関で、障害者雇用の数が水増しされていたことが発覚したニュースだった。今回担当したディレクターは、この問題の裏には障害のある人と一緒に働くのはそもそも無理だし、面倒くさいという思いがあるのではないかと問題意識をもった。基本的な考えとして、障害は社会の側にあるということで、障害のある人が職場に来たときにしっかりとした対応や配慮ができれば、本当は能力を発揮できる人がもっといるのではないかと考えた。また、見る側のハードルが高くならないように、できるだけ笑いながら感じてもらいたいと思って制作した。指摘をいただいた「牛の

肥料」や「三流企業」については、スタッフで共有していきたい。私たちも「アクションにつなげたい」という思いはあり、来年度に向けて体験も含めて考えている。「車いす女子目線」のコントを作ったときに制作する側もかなり学びや驚きもあったので、番組だけではなく、実体験できるような仕掛けが作れないかと思う。今回いただいた声も参考にしながら、番組の制作を続けていきたい。

○　５月３０日(木)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　子どもの“声なき声”第２回「“不登校”４４万人の衝撃」　(総合 後 10:00～11:18)を見た。周囲の同世代の人たちの関心は高く、多くの人が見ていた。生放送の番組で、ＳＮＳでトークライブも同時配信していた。両方見ていたが、トークライブのほうではＳＮＳの声を拾っていたが、番組と融合することはなかったので、残念に感じた。トークライブが子ども向け、ＮＨＫが大人向けの番組として同時進行していたのかもしれないが、改善の余地はあるように感じた。ただ、番組自体はよかったので、再放送してほしいと思う。

○　「ニュース６３０　京いちにち」の「京これ！」はよいコーナーだと思う。５月２２日(水)では、京都でオープンしたｅスポーツの施設や高校のｅスポーツ部のことや、６月１２日(水)では、ボードゲームが若い人たちに人気で、京都市ではその場で楽しめるカフェが次々とできていることを紹介していた。京都のトレンドについて、実際に楽しむ人たちの声や様子を通じて、ありのままに伝えていてよいと思った。

○　６月１８日(火)の夜に、新潟県で震度６強の地震が起きたので、その日の晩は気になってニュースを見ていた。翌日の朝、民放の情報番組では地震は昨晩のこととして報道していたが、総合テレビで連続テレビ小説「なつぞら」の放送の際、Ｌ字画面で「新潟県で震度６強」と出ていたので、また地震が起きたのかと思った。横にわかりやすく発生した日時を表記していたら、視聴者には正確に伝わるのではないかと感じた。

○　６月１９日(水)の連続テレビ小説「なつぞら」の放送時に出ていたＬ字画面の情報を見て、地震がまた起こったのかと思った。「新潟県で震度６強」と大きく出ていたのに対し、発生日時がわかりにくかった。

○　Ｇ２０に向けて、警察官が厳戒態勢で警備を行っている。今月末に向けて、いろいろな情報提供をお願いしたい。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０１９年５月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１５日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、９人の委員が出席して開かれた。会議では、まず、「２０１８年度近畿地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。続いて、事前に視聴してもらった、ごごナマ　おいしい金曜日「旬を味わう“春野菜”」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	篠　　雅廣	(大阪市立美術館　館長)
副委員長	山崎　弦一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会　会長)
委　員	市田　恭子	(デザイナー集団 Team coccori　事業代表)
	片山九郎右衛門	(公益社団法人京都観世会　会長)
	小林祐梨子	(スポーツコメンテーター)
	鈴木　元子	(月刊大和路ならら　編集長)
	矢崎　和彦	((株)フェリシモ　代表取締役社長)
	安井　良則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)
	山舗　恵子	(京都リビング新聞社　編集部長)

（主な発言）

＜ごごナマ　おいしい金曜日「旬を味わう“春野菜”」
（総合　４月１９日(金)放送について＞

○　野菜工場については、経営の観点からはおもしろい取り組みだと思ったが、それ以外の内容はあまり興味を持ちにくい内容だった。春キャベツのみそバター煮込みなどがおいしそうだと思ったことと、西川きよしさんや近田雄一アナウンサーといった出演者がいい味を出していると感じた。

○　春野菜の料理はどれもおいしそうだと思ったが、放送時間内に料理を段取りよく、見ている人にもわかりやすく披露する京料理店のおかみの村田加陽子さんには感服し

た。近田アナウンサーは、西川さんをさりげなくフォローしながら、ほかの出演者の突拍子もない発言にも惑わされることもなく進行していてさすがだと思った。野菜芸人の土肥ポン太さんが番組でリポートしていた水耕栽培による野菜工場は、興味深かった。水耕栽培を用いた野菜工場は、コスト面ではまだ課題はあるようだが、安全で生産性と土地利用率に優れた栽培方法で、思っていた以上に野菜が出回りつつあることを知ることができた。お台場の日本科学未来館で開かれている重機の展覧会は、土木技術分野の方々や重機が大好きな方々に意味深いものだと感じた。ただ、工事現場を日常的に見る自分にとっては珍しくないものだった。４月からの新しい出演者は、まだやりとりに慣れていない印象で、情報が頭に入りにくかった。

○　楽しく軽い気持ちで見ることができた。関西発の全国放送番組だが、関東の人にも抵抗なく受け入れられる作りだったように思う。出演者４人のチームワークはとてもよく、おぼつかないところは多少目についたものの、ほのぼのとして、好印象を持った。今回出演していた村田さんがとても品のよい方で、作る料理も素材を生かした作りやすいものばかりで、参考になった。この時間帯にテレビを見られる人は、家事をしながらの主婦や、テレビを流せる職場の方が多いと思うが、それぞれのコーナーが短めなので、見やすかったのではないかと思う。個人的に心が引かれたのは、重機のコーナーだったが、一方で気になった点は、中継などが途中で入るときにスタジオの声が少し入り、雑音めいて聞こえたのが中途半端な感じを受けた。また、春野菜はそもそも葉も柔らかくて、はんなりと見えるものなのかと思っていたら、最初に登場したざるに盛られていた野菜は、若干元気がないように感じた。

○　「ごごナマ」は時々見ているが、西川さんの発言で振り回されるほかの出演者の対応もおもしろい。特に、テンダラーの浜本広晃さんの突っ込みがよく利いていたと思う。三戸なつめさんは、アドリブが上手で、いいコメントをすると感じた。ポン太さんの「ポン太テレパシー」も、以前流行したオンラインゲームのようでおもしろかった。村田さんは、生放送でも緊張せずに手際がよかったのがすばらしいと思った。また、東京と大阪のギャップを意識しているのかもしれないが、東京発の月曜から木曜の「ごごナマ」のスタジオセットには伝統工芸品などが飾られている一方で、大阪制作のセットには巨大なきんめだいがあって、ギラギラし過ぎていると感じた。また、ふだんもいろいろなところから中継を出しているのだろうが、今回の日本未来館の展示は見に行きたいと思わせるものだった。番組の冒頭で「忘れられない味」を視聴者からＦＡＸとメールで募集していたが、生放送の間にどれぐらいの視聴者から反応があるのだろうか。この時間帯の視聴者はメールやＦＡＸがよいのかもしれないが、自分だったらＳＮＳのほうがよいと感じた。

○　いろいろと突っ込みながら見られる楽しいバラエティー番組だと思ったが、関西の人以外が見て楽しめるテイストなのだろうかと感じた。浜本さんのフォローはよく利いていて、頑張っていたという印象を持った。番組冒頭の野菜の盛りつけが、春らしくしゃきっと見えたらよかったと思う。料理はどれもおいしそうで食べたいと思ったが、温かい料理は温かく食べたほうがよいと思うので、スタジオでの作る順番を考慮したほうがよいのではないか。また、皿の上で包丁を使っていたのが気になった。野菜工場の中継では、フリルレタスは主婦なら誰でも知っていると思うが、グリーンマスタードをお茶漬けにしたり、スイスチャードを豚しゃぶに入れて赤くしたりしていて、とてもおもしろかった。昼の時間帯は主婦や高齢者が見ていると思うが、暗いニュースばかりだと気分が萎えると思うので、こうしたほのぼのとしたバラエティー番組は、関西らしくていいと感じた。

○　番組の冒頭から進行に少し不安を感じたが、三戸さんの自然な対応やコメントに救われたような気がした。番組は楽しかったが、春野菜のテーマからみずみずしさを期待していたので、そうではなかったのが残念に感じた。盛りつけられていた春野菜の中にあった菜の花についても紹介してほしかった。村田さんのおばんざいはどれもおいしそうだったが、煮ている時間などの間に、旬の野菜の生産地の様子など春めいた映像をもう少し挟めるとうれしいと思った。野菜工場の中継で、出演者の衣装に対して、スタジオ出演者が「療養中？」と冗談っぽく尋ねていたが、そのような表現は控えたほうがよかったと思う。「ポン太テレパシー」はほんわかとはしていたが、少し時間が長かったように思う。工場野菜の話題は生産者の努力は感じたが、今回のテーマとは合わないと感じた。また、中継で紹介されていた工事現場を体感できる展覧会は関西でも開催してほしいと思った。

○　「おいしい金曜日」というタイトルどおりの内容だと感じた。金曜日は、週末の予定を考えたり、おいしいものを作りたいと思ったりするので、見ていて楽しい番組だった。平日午後１時台の放送で、うるさすぎることもなくゆっくりと時間が流れている番組で、西川さんの突拍子もない感じも、フォローする浜本さんもおもしろかった。生放送で３品作るのは本当に大変だと思うが、春野菜は味が濃いからか、どれもまねしやすいシンプルレシピで、見ていて本当に楽しかった。アスパラの保存方法や春野菜の栄養などの情報も紹介されていて、よかったと思う。スタジオだけでなく、ニュースのコーナー、ポン太さんによる野菜工場の中継、重機の展覧会会場からの中継が入り、全く飽きない１時間だった。野菜工場の中継現場のポン太さんがふだんの番組よりかなり緊張している様子だったので、事前収録したＶＴＲがない、すべて生放送

の番組は本当に大変なのだと感じた。

○　あまり見ない時間帯の番組だが、春らしくていい番組だったように思う。出てきた料理も大変おいしそうで、食べてみたいと思った。ただ、出演者のやりとりがかみ合っていない印象を受けた。また、重機の展覧会からの中継は、春野菜のテーマからすると、固い話題に飛ぶ感じがしたので、春らしいイメージで統一されてもよかったように思う。また、野菜工場は、企業経営として採算を取るのが難しいと聞く中で、大変立派な経営をしていると感じた。単価の高い野菜を生産しないと中々採算がとれないのだろうと改めて思った。そうした野菜工場で作られている野菜はほとんど知らなかったが、特にスイスチャードは豚しゃぶに入れて食べてみたいと感じた。

○　出演者の掛け合いのテンポが速すぎて騒がしく感じた。関西以外の視聴者だったらなかなかついて行けないように思う。背景のディスプレイに、きんめだい、赤い卵、おいしい金曜日が順番に出てきて煩わしく感じた。ＢＧＭはずっと流れていたが、料理の紹介をしているときは止めるなど、メリハリをつけたほうがよかった。野菜工場の中継では、ポン太さんと社長の掛け合いで新しい試みや味の紹介をしているが、カメラワークはせわしなく、見ていて落ち着かなかった。また、皿の上では料理用の包丁を使うべきではないと思うが、そうした映像を流してしまうと、ＮＨＫがそうした作法を認めていると受け取られかねないと感じた。ほかの出演者がコメントでフォローはしていたが、もう一度まな板の上に戻して包丁で切って戻すか、事前にもっと細かく切っておけばよかったと思う。

○　身近な素材を使った料理も、一工夫加えることでもてなし料理になることが参考になった。忙しいとその一工夫が難しいが、その分番組として楽しめた。料理人の村田さんの語りも柔らかく、西川さんとのやりとりにも温かさが感じられた。ただ、出演者が多すぎて、個々のキャラクターが生かされず、残念に感じた。料理と中継、週末の天気、お出かけ中継などテーマも盛りだくさんで、全体のバランスが悪く、中継とスタジオとのつなぎもぎこちなく感じた。せっかく春野菜を使った料理という「はんなりとした」テーマなので、全体的にもう少し落ち着きがあればよかったと思う。

○　自分で料理はしないが、非常に興味を持った。外国人観光客に精進料理を提供する際、野菜だけで料理を作る人たちにとっては、メニューに困ることがあるようなので、大変参考になる内容だと思った。

（ＮＨＫ側）

春らしさをどう出すかが今回のテーマの肝だったと思う。番組は試行錯誤の途中なので、ぜひ今後を見守っていただきたい。また、包丁の作法についての指摘については、スタッフの中で共有したいと思う。

（ＮＨＫ側）

４月から新しいレギュラー出演者となったが、実力のある出演者ばかりなので、さらによい番組づくりを目指していきたい。

（ＮＨＫ側）

大阪局制作の「ごごナマ」はニュース番組と同じスタジオを使っている。大阪局は、首都直下地震などの際の本部代替機能を担っているが、緊急報道にもすぐに対応できるような体制で、ふだんから１時間全国向けに生放送をすることは非常事態の備えになると考えている。セットについて意見をいただいたが、西川さんを大阪発の「ごごナマ」レギュラーに迎えたときに、大阪から全国放送を出していることを一目で認識してもらえるよう、セットに大きな鯛を作った。番組のアイコンの位置づけとして一貫して使っているが、目玉の大きなきんめだいの金は「おいしい金曜日」の金という意味合いも込めている。今後も全国のいろいろなところから、全国のアナウンサーが５分程度の中継を出す予定だ。現在、中継には、機動性の高い、緊急報道でも使うシステムを導入しており、いろいろな場所からの中継もこの番組の売りとしている。指摘のあったように、旬の場所に出かけることも毎回意識しているが、今回は、ふだん見ることができない野菜工場と、重機の展覧会を紹介した。視聴者からのメールやＦＡＸの数は、ゲストやテーマによってまちまちだ。事前にホームページなどでテーマの発表はしているが、放送が始まってからメッセージが集まることが多いので、番組の後半で伝えることが多い。いただいた中から、共感を呼べるようなメッセージや質問をできる限り紹介している。

＜放送番組一般について＞

○　４月１９日(金)のかんさい熱視線「もう一度勝たせたい　密着　競走馬“再生”」を

見た。この番組の趣旨は、競馬というよりは、馬と人との触れ合いで、馬を育てながら自分の居場所を見つけた人が、馬の居場所を見つけるという話だと思った。競走馬のエイシンバランサーが番組の中心となっていたが、映像からは、気分屋なところがよく撮れていると感じた。そして、馬と触れ合う調教師の新子雅司さんの厳しい表情が、だんだん優しく見えてきて、馬も新子さんに触れられるのがうれしそうにしていた。また、新子さんのその後の調教に影響を与えた馬、タガノジンガロのことを知って、胸がいっぱいになり、まさに人馬一体という関係があると感じた。園田競馬場では１日１２レース、１年間 2,000 レースもあることや、新子さんの仕事は午前１時半から始まり、７時間近くもみずから調教していることに驚いた。新子さんが騎手出身だと紹介されていたが、騎手出身の調教師はどの程度いるのだろうか。逆に、新子さんのやり方が増えていったときには、きゅう務員のあり方はどうなるのかと思った。新子さんが「この馬をもう１回なんとかしないと馬の行く末がわからないからね」と話をしていたが、ニュースで栗東市に引退競走馬を支援する施設ができたことを知り、他の地域ではどうなっているのだろうかと思った。また、番組の中で、馬の種類、模様、色などを、イラストを交えて紹介すると、もっと馬に興味を持てると思った。

○　馬を育てる様子を見て、新子さんのマネージメント力のすごさを感じた。馬の特性をよくわかったうえで調教していることがわかった。午前１時半に仕事を始めるというストイックな部分に、感心した。最後にエイシンバランサーが走るシーンでは、新子さんの馬への愛情が伝わってきたので、一緒に応援したくなるくらい、愛着を持って見ることができた。

○　「もう一度勝たせたい」というタイトルは、新子さんの気持ちを表していて、すごくいいと思った。調教師はいろいろな人をマネージメントする立場で、新子さんのようにみずから馬に乗って調教を行うほうが珍しいのだと初めて知った。有名な馬は子孫を残すために牧場に行くことは知っていたが、それ以外の馬たちがどうなるかということも改めて知った。新子さんの厳しい表情から、プロフェッショナルだということが表れていたが、奥さんとの食事のときの優しい表情もよかった。映像からは、雪の中での調教といった厳しさと、馬への愛情があふれていたと感じた。新子さんが、馬の性質をいろいろと理解しながら調教している様子を見て、人材育成にも共通すると感じられて、自分自身も参考になることがあってよかったと思う。疑問に思ったのは「馬に負荷をかける」ということで、具体的にどういうことなのかと知りたいと思った。全体的には、月日をかけて丁寧に追ったドキュメンタリーだと感じた。

○　冒頭からアスリートの復活劇を見ているようで、ひきつけられた。騎手や馬は注目

されるが、そこを支える調教師という重要な役割の方がクローズアップされており、どういう仕事をしているか知らない私にもわかるように丁寧に伝えられていたのは、感激した。馬と向き合い人生のすべてをかけている姿がしっかり描かれていたし、映像から馬が気分屋であることも伝わってきて、２か月間の取材すべてが詰まったような映像ばかりだった。「個性を輝かせる」「褒める」といったことばを聞いて、まさに今求められている指導にあてはまると感じた。アスリートでも周りの意見を聞くタイプがいるが、自分の感覚を尊重することも大事だと思った。エイシンバランサーが練習で外馬場を一切走らずに本番に挑んだのかということと、どうして外馬場を嫌がって内馬場を好んでいるのかが気になった。奥さんとの食事のシーンが新子さんの唯一のオフの顔だったと思うが、完ぺきすぎる方なだけに、オフの顔ももう少し見てみたかったと思う。

○　大変興味深い番組だった。新子さんのような方を発掘するＮＨＫのネットワーク力や取材力はすごい。新子さんは、競走馬の再生を通じて、自分自身を再生しているのではないかと思った。競走馬に対し、子どもに向き合うように接していて、そうした姿勢は、学校教育にも通じることではないかと感じた。競馬は、競走馬と騎手にいつも焦点が当たっているが、調教師のような重要だがあまり知られていない職業にスポットを当てたのはいいと思う。「かんさい熱視線」は、時々、テレビで宣伝していることは知っていたが、しっかり見たのは初めてだった。この番組の放送時間にテレビは見られないので、もう少し遅い時間帯にも放送してほしい。別の視点だが、マルチ編成を活用していつでも見られたらいいと思った。世界中の人たちが情報を取捨選択することに苦心する状況で、みずから番組情報を探しに公式サイトに行かないと思うし、メールで番組情報を送られてもなかなか読まないと思う。例えば、アプリでもっと簡単に番組情報が見られたり、キーワードを登録するだけで情報が送られる仕組みがあれば、それをきっかけに録画したり、見たりすることができると思う。すばらしい番組に、より多くの人が接点を持つ機会を作ってほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

技術的にはマルチ編成はできるが、際限なくマルチ編成をすると、逆に視聴者へのサービスが低下することもあると考えており、一定の基準を設けて実施している。

（ＮＨＫ側）

番組の告知についてだが、テレビをあまり見ない方にとって放送での番組宣伝だけでは不十分だと思う。大阪放送局のＳＮＳで

おすすめの番組情報なども発信しているので、参考にしていただけたらと思う。

○　競走馬といえば関西は栗東トレーニングセンター、関東は美浦トレーニングセンターにすべての馬が集まって暮らしていると漠然と思っていたので、今回の番組で地方競馬の馬は、所属する競馬場の敷地内のきゅう舎で生活し調教も行っていることを初めて知った。馬の調教についてもほとんど知識がなかったが、新子さんがシーズン中は毎朝午前１時半から最長で７時間近く馬に乗って調教を行い続けてるということは並大抵ではないと思った。また新子さんが馬を愛し、どこまでも競走馬に寄り添っていこうという気持ちが番組を通じて伝わってきた。「しっかり走らせてあげないと、オーナーがあきらめたらこの子の行き先がどうなるかわからない」ということばが心に残った。番組を見て、新子さんが馬と心を通わせ、深い愛情で接しているからこそ、馬も新子さんの思いに応えているのではないかと思った。

○　人生とは何かを考えさせられる番組だった。調教師がどのような仕事をしているのかまったく知らなかったので、勉強にもなった。調教師の新子さんはストイックで、本当に笑わないことが印象に残ったが、真剣だからこそだと思った。撮影したカメラマンも負けずに新子さんに寄って撮っていたからこそ、視聴者に新子さんの強い思いがしっかり伝わったのではないかと思う。特に、「また生まれ変わって調教師はしたくない。」ということばを聞いて、自分の頑張りはまだまだだと大いに反省した。また、死んでしまった馬との別れについて話すシーンは非常に印象的で、形見のたてがみを握りしめた姿が思いのすべてを語っていると思った。奥さんと食事をする場面で新子さんに笑顔はあったものの、一緒に食事をしているのが奥さんだとわかりにくい映像となっていたので、違和感があった。また、競馬をまったく知らないため、調教師と競馬場の関係やシステムについていろいろ疑問に思うことはあったが、今回は馬と新子さんの関係に絞ってしっかりと描かれていたので、見ていて満足できる番組だった。

○　調教師の仕事は全然知らない世界で、大変な仕事だということがわかったし、プロフェッショナルの仕事とはこういうことなのかと改めて感じ、自分自身のことを振り返るきっかけにもなった。特に新子さんが「次の人生ではもうやりたくないと思うほど、この仕事をやりきりたい。」と話していたが、なかなかそこまでの境地にはなれないとみずからを反省した。馬と人を同列にはできないとは思うが、人材育成の面でも大変参考になると感じた。

○　馬の再調教に関する番組で、やる気がなかったり、全力で走らなかったりする馬を気分よく走らせようと取り組んでいることに、組織論、人生論の観点から見て非常に感銘を受けた。一方、管理職のストレス解消のしかたという意味で、新子さんは、たまったストレスをどう解消しているのだろうかと思った。新子さんは挫折した経験もあるので、馬を再調教しながら、自分の人生をもう一度生き直し、自分の居場所を見つけているので、それほどストレスは溜まってないのかもしれないとも思った。馬を褒めるときに、馬のたてがみや首筋をなでるといったコミュニケーションのとり方は興味深く思った。新子さんは、自分の立場をしっかりふまえているからこそ、伸び伸びと仕事をしているのだと思った。

○　調教師という知られざる世界、愛情で結ばれた人と馬との関係、新子さんのひたむきな人生など、見どころの多い番組だった。個人的には、新子さんの生き方に興味を引かれたので、もう少し新子さんの人生に比重を置いた番組でもよかったのではないか。例えば、中学校卒業の後、全寮制の騎手学校に入学したと語られているが、子どもにとって競馬の騎手などほとんど馴染みのない職業を選んだのはなぜだろうか。寡黙な方だけに、個人的な側面が描きにくかったのではないかと察するが、もう少しその半生が描けていればと思う。一方で、ことば少なく語る新子さんは印象的で、その鋭い視線がいいと思った。仕事の始まりは午前１時半。体重を維持するために一日一食。関係者が「休んだことはないのではないか」と語る新子さんに、職人としての生きざまを感じた。「生まれ変わったらもう一度この仕事にではなく、生きている間にやり切りたい」ということばも、職人としてのひたむきな生き方を感じさせるもので、鞭打たれる思いがした。社会は高度化、多様化し機会の選択も多くなった分、迷いも不安も増している。その中で常にぶれずに原点を見つめている。そんな尊い生き方を教えてくれるようなよい番組だった。

○　新子さんの挑戦には、感銘を受けた。さまざまな境遇の生徒と向き合う教員たちのことをよく知っているので、その教員たちの仕事ぶりと重なり、身につまされる思いで番組を見た。神戸局は以前、救急現場でのトリアージの問題なども取り上げていたが、今回の番組も含めて、取材力の高さに脱帽した。

（ＮＨＫ側）

この番組は、ディレクターが長い間温めていた提案で、積み重ねてきたものがこの番組に結実した。競馬取材のプロフェッショナルでもないので、非常に取材がしづらい分野だったが、新子さんとの人間関係も一生懸命築きながら、時間をかけて制作した。

（ＮＨＫ側）

新子さんは職人気質で、感覚で馬の気持ちを推し量っているので、調教の細かいディテールを番組で伝えるのに苦心した。ただ、ディレクターは毎日のように２か月間、競馬場に通って、人が寝ている時間にも関係を築き、ようやくできあがった番組だった。新子さんのような騎手出身の調教師は何人かはいるということだが、新子さんのように７時間も馬に乗り続ける方はかなり珍しいと聞いた。「馬に負荷を与える」というのは、調教師から馬にサインを出して速く走らせることだと聞いている。練習で外馬場を一切走らずに本番に挑んだのかについては、番組では紹介しなかったが、レースの１週間ほど前に１度外馬場を走ったときに、かなりよいタイムが出たということだ。一般的には外馬場でしっかりと走らせるが、エイシンバランサーの気持ちを理解したうえで走らせなかったということで、かなり大胆な決断だと聞いている。なぜ内馬場しか走らないのかはわからないが、新子さんによると、おそらく外馬場に行くとほかの馬が多くいて、練習だと思って嫌がるのではないかという話だった。

○　４月３０日(火)のゆく時代くる時代～平成最後の日スペシャル～「ゆく時代くる時代　ついに“時代越し”！」(総合 後 11:25～5 月 1 日(水) 前 0:30）を見た。時代が平成から令和に移るときに、どのようにテレビが伝えるのかが気になり、いろいろと番組を切り替えながら見ていたところ、この番組はタイトルから「ゆく年くる年」の雰囲気を想像していたらまったく違ったので、印象に残った。ＮＨＫにチャンネルを合わせるたびに、大阪市のジュリアナ東京が映っていたので、なぜあの場所が中継の場所に選ばれたのかと感じた。

○　５月８日（水）に、大津市で保育園児が死亡する大きな交通事故が発生したが、事故現場は、滋賀県のドライバーがよく通る場所だ。事故の報道では、保育園の職員が責められていたり、被害者の自宅に行ったりするのも目にして、報道のあり方に疑問を感じた。一方、ＮＨＫのニュースでは、７年前の京都府亀岡の暴走事故の遺族に話を聞いており、今回の大津の遺族の思いを代弁しているように感じられたので、こうした報道姿勢には共感できた。

○　バラエティー番組が大好きで、「チコちゃんに叱られる！」を見ているが、４月６

日(土)の回などで気になる点があった。働き方改革で、ＣＧチームが１０連休をとるため、顔のＣＧができないということで、チコちゃんの顔を映さないコーナーがあったが、内輪の事情ではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

チコちゃんのＣＧは、ＮＨＫアートのＣＧチームが制作していて、１回分の顔のＣＧを作るのにかなりの労力がかかっている。演出の一環だと思うが、いただいた意見は今後の参考にさせていただく。

○　５月１３日(月)のニュースで、災害時などの外国人観光客への情報提供に役立てようと、京都駅の待合室に、ＮＨＫの外国人向け国際放送を海外向けのニュースなどを表示するモニターを試験的に設置したことや、ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮのコンテンツが、ＪＲ西日本の海外向けの観光情報サイトを通じて見られるようになったことを紹介していた。以前から、災害時の外国人への案内について関心を持っていたので、よいことだと思った。

○　大型連休の間にＮＨＫの衛星放送の番組をたくさん見た。特によかったのは、４月２８日(日)のＢＳ１スペシャル「ローザンヌでつかんだ未来～バレエダンサー　須弥奈と美桜～」（ＢＳ１　後 11:00～11:49）で、これはぜひ若い人に見てもらいたいと思った。一つのことに一生懸命情熱を傾けて頑張っている２人の姿がとても輝いていた。

○　５月１日(水)の地球タクシー「大阪を走る」（ＢＳ１　後 9:00～9:49）については、日本を取り上げたのは初めてだと思うが、大変よかった。個性豊かな運転手がたくさん出てきて、大阪らしい番組という意味でもよかったと思った。タクシーに乗ったディレクターが最初に「大阪城に行ったことがない」と言っていたのが、大阪放送局は大阪城のすぐ近くにあるのにと思い、違和感があった。

○　６月末に大阪でＧ２０が開催されるが、大阪府民は、高速道路の交通規制や、電車のダイヤへの影響があるのではないかと非常に気にしている。たとえば、命にかかわるような急病になったときに救急車といった緊急車両は通れるのだろうか。また、要人の方々が移動する際は、高速道路の交通規制や地下鉄の運行規制があるのだろうか。開催直前にならないと警察は発表しないのかもしれないが、ＮＨＫが大阪府民に正確な情報を迅速にしっかりと伝えてほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

６月２８日、２９日とＧ２０が開催されるが、２７日から３０日まで主に交通規制がかかるということだ。具体的な内容はこれから発表されるが、ＮＨＫとしても、市民生活にどう影響していくのか、しっかりと伝えていく。会議自体のことだけでなく、期間中は市民生活への影響や舞台裏も取材して伝えていこうと思っている。Ｇ２０のことは住民の皆さんにあまり知られてないところがあるので、我々メディア側も、できる限りの啓発も兼ねて報じていきたいと思う。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０１９年４月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１７日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、８人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、「ニュースほっと関西」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	篠　　雅廣	（大阪市立美術館　館長）
副委員長	山崎　弦一	（日本労働組合総連合会大阪府連合会　会長）
委　員	市田　恭子	（デザイナー集団 Team coccori　事業代表）
	帯野久美子	（関西経済同友会　常任幹事）
	片山九郎右衛門	（公益社団法人京都観世会　会長）
	小林祐梨子	（スポーツコメンテーター）
	添田　隆昭	（総本山金剛峯寺執行長・高野山真言宗宗務総長・高野山学園理事長）
	山舗　恵子	（京都リビング新聞社　編集部長）

（主な発言）

＜「ニュースほっと関西」（総合　４月１１日(木) 後 6:10～6:30 近畿ﾌﾞﾛｯｸ、後 6:30～6:59 大阪府域放送）について＞

○　「１型糖尿病」の障害基礎年金の支給打ち切りの問題は、国の説明責任という意味でとても重要なニュースで、こういう問題をきちんと報道することは大切だと思った。戦前から営業していた神戸市の市場「ミナイチ」の閉鎖を紹介した企画は、地域社会の課題を取り上げていたが、少し長く感じた。昨年９月の台風２１号で発生した関西国際空港連絡橋へのタンカー衝突事故のついてのリポート企画は、原因を詳しく知らなかったので、課題がわかってよかった。京都府舞鶴市が「舞鶴引き揚げの日」を制定し、ロゴマークが公募で決定した話題は、公共放送として紹介することに意味があると思った。奈良県法隆寺で国宝である救世観音像が特別公開されている話題があったが、映像でしっかりと見られることはすばらしいことだと思うので、美術品など文化性の高い話題をもっと取り上げてほしい。泉佐野市のふるさと納税の話題は、運用

のどこが法律と照らし合わせて問題なのかがクローズアップされないまま、国と自治体との対立が大きくなってきている。国と自治体のどちらが悪いかではなく、財政がひっ迫していた自治体の状況や地元住民の声も交えながら、国と地方の関係という視点で、別途、番組で見てみたい。

○　毎年のように、造幣局の「桜の通り抜け」の話題を取り上げているが、自然の中で咲き誇る桜も美しいので、ぜひ紹介してほしい。「１型糖尿病」の年金打ち切りは、財政的な事情もあると思うが、患者の命に関わる問題だと思うので、ほかの病気でも同様のケースがあるのかも含めて、取材を継続してほしい。ふるさと納税については、国と自治体のやりとりに、ややうんざりしている。この問題は、ふるさとへの思いやりを見つめ直すような方向で議論してほしいと思う。「ミナイチ」の話題では、子どものころにお使いに行っていた近所の市場のことを思い出した。小さな市場がどんどん消えていったことを思いながら、少しさみしいような、懐かしいような気分になった。

○　「１型糖尿病」の年金打ち切りの話題では、年金支給の等級が表でわかりやすく紹介されていると思った。一方で、原告が、医療費は夫婦で月５万円程度と説明していたが、病気でどんな障害が発生するのか、治療にどのようなものが必要なのかという説明があれば、理解がもっと深まったと思う。ふるさと納税の話題は、地元局の強みを生かして、地元の住民たちがどう思っているのかも伝えてほしかった。そのほかのニュース項目を紹介するコーナーで、内容に触れられなかったニュースがあったのが気になった。神戸の「ミナイチ」の話題は、平成の終わりに 100 年続く昭和の古き良き時代の市場が幕を下ろすことを伝えており、市場のテーマソングは耳に残る曲で、効果的に使われていた。半数以上の人は店を畳むと紹介されていたが、その人たちはなぜ畳むのか、今後はどうするのかを知りたいと思った。１８時半以降の大阪府向けのパートでは、内容が盛りだくさんで大阪以外の人も知りたいと思うのではないかと思った。関西空港連絡橋の事故の企画についても、わかりやすく伝えており、大きな事故につながらないよう対策の必要性を紹介しており、とてもよかった。また、桜の通り抜けの開始を紹介する中継コーナーでは、大抵歩く人の感想を聞くだけだが、注目する桜の名前とともに、花をアップにして紹介していた。ふだん自分で見に行くと、人の多さに圧倒されてゆっくり花を見られないので、とてもよかったと思う。

○　関西空港連絡橋の事故の問題を知らない角度から取り上げていたので、とても参考になった。ふるさと納税の話題については、たくさんの納税額を得た自治体の中には、耐震条件を満たさない役場や、小学校などの公共施設の改修にあてる費用のめどが立

った所があると聞く。ふるさと納税は、できた当初は、人口流出して都会に出て行ってしまった人の税金を生まれ育ったふるさとに納税してもらうという発想だったと思う。返礼品を工夫して納税額がかなり増えたという面もあるので、いろいろな自治体を取材してほしい。

○　とても新鮮で、ボリューム感のある番組だった。番組の最初に、出演者が５人も並んでいて、それぞれどういう役割の人なのか、興味を持った。ニュース番組のデザインは青や白を基調とすることが多いが、このセットには奥行きがあって、温かみのある印象を持った。そのほかのニュース項目を紹介するコーナーで、滋賀県のニュースだけ内容に触れられなかったので、どんなニュースだったのか気になった。全体的にニュースをカジュアルにまとめていたが、メインキャスターの男性が固い印象だったので、そのほかのニュースを読む別の男性アナウンサーに切り替わっても、メリハリがなかった。大阪以外では見られない後半は、本当に興味深かった。特に関西空港連絡橋の事故の企画を見て、こんなことが起きていたのかと思い、全国にも伝えるべき内容だと感じた。今後も引き続き伝えてほしい。「ええやん！」というコーナーで、中継で桜の通り抜けを紹介していたが、桜を一つずつ名前とともに紹介していた。今は花見のシーズンで、桜の名前を知りたいと思うこともあるので、タイムリーに感じた。一方、気になったのは、桜の中継の際のかけあいで、ことばづかいが少しカジュアル過ぎると感じた。全体的には、本当に満腹感を感じるような放送で、大阪以外でも後半の特集が見たいと思った。

○　一つ一つのニュースは長すぎず、難しい分野もわかりやすく伝えており、スムーズに頭に入ってきた。「１型糖尿病」の年金打ち切りのニュースはもっと報道してほしいと思った。原告のように諦めない人が裁判を起こすことで注目を集めているが、まだまだ認知されていない病気だと改めて感じた。また、神戸に 100 年続く市場「ミナイチ」があったことを初めて知ったが、今は大手チェーンのスーパーや薬局が増え、昔ながらの商店はさらに少なくなっていくのだろうと感じた。

○　４月に入ってから、番組を初めて見たが、出演者も変わっていて、非常に爽やかで、好印象を受けた。タイトルもひらがなで「ほっと関西」なので、あまり肩のこらない感じでよいと思った。中でもＮＨＫらしいと思ったのは「ミナイチ」の話題。かつて子どものころには市場がたくさんあり、市場は地域社会の結節点になっていたと思う。このような地域社会の結節点をどう考えていくのか、その点はもう少し掘り下げて議論していってほしい。関西空港連絡橋の事故の企画も、絶対的な安全を考えると、行政側も事業者側ももっと踏み込んでコミュニケーションをとる必要があると問題提

起しており、非常によかった。キャスター同士のやりとりでかみ合わないところがあったが、少し慣れてくるとスムーズに行くのではないかと感じた。

○　さまざまな事件事故も消耗され忘れ去られてしまう面はある。一方、そうした事件事故をどのように取り上げるかはメディア側の責任だと思う。「１型糖尿病」の障害基礎年金の打ち切りは財政縮減という大きな課題の中で起きた措置だと思うが、ほかの疾病にも影響していないのか、その点についても触れていればよかったと思う。また、関西空港連絡橋の事故の企画では、事故を起こした船舶会社の社長のインタビューが放送されていたこともよかったと思う。

○　始めのニュースのピックアップ項目が画面に幅をきかせており、アナウンサーが窮屈そうで、見ていて少し狭苦しく、また項目の背景が少し華やかすぎるだろうかなどとも感じた。「ミナイチ」の特集では、最初から少し違うと思わせる映像で、アングルや風景・人物のトリミングの仕方が、市場をとらえたスチール写真の写真集を見ているようで、引き込まれた。粗削りな印象を受ける編集と、７０年代ポップスを感じるオリジナルソングがマッチし、早送り映像を持ってきたのも斬新で、消えゆく市場をとらえているのになぜか芸術的に感じた。随所にユーモアやあたたかさを感じた。また、あと１日で開業４０周年だったという中華料理屋の話題を見て、丁寧な取材姿勢を感じた。２８店舗を全部取材したのかと思った。はじめは高い位置から見渡していた市場を、最後はローアングルで明かりの消える瞬間が収められ、締め方としても敢えてスタンダードな演出を選ばれたあたりが、ニュースではなくそこに生きる人のストーリーを写そうとしているようでよかった。

○　100 年の歴史に幕を下ろす「ミナイチ」は、生田神社の東山地区というエリアにある商店街で、やり方次第では京都の錦市場のように住民たちにも、来訪者にも愛される神戸の名物スポットに転じることができたかもしれないと考えさせられるニュースだった。今回の件は、ニュースの題材としてはよくある話の一つだと思うし、これが自分と関係ない場所の出来事であれば、一つの情報として深く処理されずに消え去ってしまっていたことだと思う。情報の送り手と受け手の間に起こる化学反応は興味深いテーマとなりそうで、放送というシステムを用いて人々に新たな気付きを与えることが出来るということだと思う。

○　「１型糖尿病」患者に対する障害基礎年金について、今回の判決では「丁寧な説明を行わなかったことが違法」としているが、審査基準の変更は違法としていないので、障害基礎年金の支給がすぐに再開する可能性は低いと思った。神戸の「ミナイチ」は、

子どものころの近所の市場がそのまま残っている感じで、地域で長年親しまれてきたのだろうと感じた。兵庫区にあって、阪神・淡路大震災にも耐えたのだとも思ったが、このような 1960 年代、1970 年代がそのまま残っているような場所が消えてしまうのは、少し寂しい気がした。後半では、造幣局の「桜の通り抜け」の中継コーナーを見て、冬は完全に去って春の到来を感じた。関西空港連絡橋の事故の企画では、船舶会社の社長のインタビューを聞きながら、あの凄まじかった風雨を思い出し、これまでの方法や認識は、通用しなかったんだろうと思った。今後はこれまでの経験をりょうがする災害が発生するだろうし、もっとしっかりと対応していかなければならないと考えさせられた。気象情報のコーナーで、和歌山県有田川町でたくさんのこいのぼりが風に吹かれている様子が紹介されていた。すばらしい風景だった。

（ＮＨＫ側）

キャスターのやりとりについては、はじまって２週目の放送ということで、今後を見守っていただきたい。「１型糖尿病」の裁判のニュースについて多くの意見を頂いたが、こういったニュースについては、我々も注意深く、継続的に追っていく必要があると感じた。また、ふるさと納税については、これも最初は国の旗振りで始まった制度だが、自治体ごとにやり方が違う中でかなり大きな差が出てきている。返礼品は地場産品で、寄付金額の３割以下という話になってきている中で、高額な返礼品を提供する自治体のやり方にはいろいろな意見はあると思う。こうした意見が分かれるものについては、多くの角度からしっかりと取材していく必要があると感じた。

（ＮＨＫ側）

４月からは必要なニュースを柔らかく、一つ一つを掘り下げながら、見やすくしていこうとリニューアルした。まず「１型糖尿病」の裁判については、患者の実情なども交えわかりやすく伝えられたのではないかと思う。その後のニュースで項目として紹介した４本のうち、２本を放送しなかったのは、「1 型糖尿病」の判決で国が敗訴というニュースが急きょ入り、時間をかけて伝える必要があったためだ。１８時半以降に滋賀県向けのニュース番組で見ていただけるという判断から滋賀県のニュースを放送しなかった。また、「ミナイチ」の話題は、いろいろな取材の切り口があるので、次につながるように取材していきたい。４月から始まった「ええや

ん！」は、月曜日から金曜日まで趣向を変えている。木曜は中継の日で、造幣局の「桜の通り抜け」を紹介した。桜が本当にきれいだったので、オープニングもエンディングも桜の映像を入れた。関西国際空港連絡橋の事故については、事故を起こした船を所有する会社の社長がいる福岡まで行ってインタビューを撮ってきた。海上保安庁側と会社側の課題を洗い出し、具体的に起こっていたことがよく分かるリポートだったと思う。このリポートを大阪府以外でも見たかったという指摘もあったが、この日は大きなニュースが入り、やむなく大阪府でしか見られない時間帯での放送となった。

＜放送番組一般について＞

○　４月５日(金)えぇトコ「達人が教える秘密の嵐山～京都・嵐山～」は、とてもさわやかないい番組だった。かつて嵐山の渡月橋から鳥居本のコースを何度も歩いたが、これほど知らない嵐山があったのかと感じた。人力車でしか入れないという閑静な竹林に行ってみたいと思った。旅人の泉ピン子さんと南果歩さんの掛け合いはおもしろくて、上品な番組の雰囲気とマッチしていて、とてもいい雰囲気を醸し出していたと思う。出演者がいろいろなものを食べていたが、屋形船で本格的な食事ができることは知らなかったので、記念日に使ってみたいと思った。

○　嵐山や嵯峨という名前の由来や、桜との関係などをもう少し掘り下げたうえで、嵯峨嵐山のいいところを紹介したらよかったと思う。路地裏の場面はおもしろかったし、人力車に乗らないといけない道があることなど地元の人でも知らないようなこともたくさん紹介していて楽しめたが、いろいろな場所を紹介しすぎているように感じられた。一方で、夕景や雨上がりの竹林など、その土地が魅力的に見える時間帯の風景も入れたらよかったと思う。また、嵯峨嵐山はどのあたりを示すかはあまり知られていないので、古地図などを出すとよかったと思う。地図を重ねながら、時代の変遷とともに、歴史のある場所がどう変わったか、歩いている路地裏がどのあたりなのかをわかるようにしていたら、地元の人も楽しめるように感じた。

○　地元人がよく知る亀山公園の景色から番組が始まったので、これは期待できそうだと感じた。人力車だけが入れる道があることや、あだし野念仏寺の中の竹林も知らなかった。番組で、人のいない竹林を久しぶりに見て、嵐山のいいところはまだあると感じられた。桜を代々植樹してきたという話が出てきた場面で、案内役の達人の「先

人から受け継いで来たものを、次の人たちに」ということばはいかにも京都らしいと思った。いろいろな京都のよさがエッセンスとして少しずつ入っていて、地蔵信仰や、北嵯峨のたけのこ畑の場面で出てきた田舎らしさもうれしく感じた。ただ、気になったのは屋形船で弁当を食べる場面。弁当は早めの予約が必要だと思うので、そうした情報はさりげなく入れたほうがよかったのではないか。また、たけのこを掘る道具について番組では触れなかったが、おもしろい道具なので紹介してもよかったと思う。

○　京都はいろいろな切り口で紹介できる、魅力ある街だと感じた。愛宕神社は閑静でいい雰囲気だが、番組で紹介すると観光客が増えてしまうのではないかとも思う。京都には寺以外にも貴重な美術品・骨とう品もあるので、こうした市井の美術品をテーマにしたらどうか。また、寺院の大きな庭は紹介されているが、京都には本当にすばらしい坪庭もあるので、何かの機会に紹介したらよいと思う。

○　泉さんの毒舌が本当におもしろくて、笑いながら見ていた。一方で、ふだんの回と比べて、気になる表現がいくつかあった。「いにしえの里で一番顔が広い主婦」「料亭に負けないおふくろの味」といったキャッチコピーや、テロップなどが多いと思った。高齢の方がことばを聞き取れなかったときには、キャッチコピーが役立つかもしれないが、少し多いと感じた。番組を見るうえでわかりやすい地図はほしかったと思う。嵐山はよく行くが、地元の人ではないと、位置関係がよくわからなかったのではないか。

○　これまで何度か愛宕山に登ったことはあるが、ふもとの景色はとても新鮮で、穴場を見せていただいたと思わせる情報もたくさんあった。南さんの人柄と、泉さんの飾らない性格が番組にとてもマッチしていた。春を感じる食と景色を紹介するゆったりとした見やすい番組で、嵐山に行ってみたいという気持ちにさせられた。京都全体であてはまることだと思うが、1,200 年変わらない姿を維持するのは本当に大変なことだと思う。人の良さや思い、覚悟がかなり伝わってくる内容だった。名所以外にも竹林がいろいろあることを知ったが、竹林の音を聞いてその場所にいるような気持ちにさせられた。いいたけのこを作ることは本当に大変なことだと知り、だからこそブランド化されているのだと感じた。

○　大阪人は「達人が教える秘密の嵐山」というタイトルを聞いたとたんに、「秘密はテレビで教えたらあかんやろう」と思いながらも見るので、つかみとしてはとてもいいと思った。何年も行っていないので嵐山の風景をとても懐かしいと思ったし、確かにだれも知らないようなところが紹介されていたようにも思う。とりわけ懐かしかっ

たのは鮎茶屋としても有名なお店で、ＮＨＫで紹介すると、客が殺到するのではないかと思ったが、あゆの季節になったらまた行ってみたいと思った。最後にたけのこの話題で登場した長濱文子さんが「嫁いで４２年間自然とともに暮らしててすごく幸せだった」と言ったときの笑顔がとてもすばらしく、本当にいちばんよかったと感じた。

○　出演者がプライベートなことを冗談のように話しているのが、気になった。また、紹介されたお店の中には高級な所もあったので、嵐山の町を知ってほしいのか、こうした名物や名店を紹介したいのか、番組のねらいが少しはっきりしないと感じた。嵐山界隈は、京都市中から遠く、範囲も広いので、２人がどこを歩いてるか分かりにくいと感じた。テロップや地図を載せるなどの補足をすれば、イメージはわきやすいと感じた。

○　昨今は人であふれかえる京都を見慣れてしまったので、ひと気の少ない京都の風景は新鮮だった。泉さんと南さんの会話も楽しく、達人と呼ばれる方たちも自然体だったのがよかった。また、３９分の番組が「とても長く」感じた。楽しくてあっという間というのはよくあるが、楽しくて本当に長く感じたといえる番組は珍しいと思う。じっくりスローペースで案内してもらったので、見終わったあと、ずいぶんゆっくりできたという満足感が残り、いい時間をプレゼントしてもらったように思った。１点だけ気になったのは、「達人」というくくり方は便利だが、昨今は達人が大安売りされているように思う。毎日を大切に生きている方、仕事に真摯（しんし）に向き合っている方は、そう見えてしまうかもしれないが、単純に「達人」でくくってしまうのは、少々安直なようにも思った。

○　嵐山の念仏寺のあたりは頻繁に足を運んでいる場所で、取材していた繭の店も、竹の店もよく知っており興味深く見ることができた。地域の達人のおかげで価値ある情報に絞り込んで紹介されていたこと、また、２人のタレントの掛け合いや、彼女たちと達人とのやりとり、訪問先で出会った人々との会話によって、嵐山の持つ魅力がうまくあぶり出されていき、番組にどんどん引き込まれていった。人がいて暮らしがあって街があることを感じ取れる番組だと思った。過去の放送リストの中によく知っている地域があったので機会があれば見てみたいと思ったが、やはり番組化しやすい場所が多く選ばれているように感じた。それも当然のことだとは思うが、ふだんメディアに登場することのない地域の町並みや暮らしぶりなどの情報にも触れてみたいとも思った。

○　桜の有数の名所である嵐山を取り上げていて、なるほどと思った。この番組では、

嵐山の達人と称される方々が地元ならではの嵐山を、旅人の泉さんと南さんに案内していた。番組の前半は渡月橋周辺の天龍寺や竹林の小径など、多くの観光客が訪れる「嵐山」の紹介で、その穴場的なスポットとして老舗料亭の料理を屋形船で楽しみ、人力車に乗ってふだんは入れない道を散策する様子はうらやましいと感じた。後半では鳥居本、あだし野、愛宕神社が紹介されていたが、こうした場所も嵐山ということを初めて知った。また、達人の今井芙沙代さんの「ここは平安時代は風葬地区」という発言を聞いて、当時の様子などをあらためて調べた。最後は、北嵯峨の農家でたけのこ掘りと早堀りたけのこの料理が紹介されていたが、本当にやわらかくておいしそうだと思った。今回の番組を見て、特に嵐山の奥である嵯峨野には是非行ってみたいし、たくさんのお地蔵さんを拝んでみたいと思った。また、ユーモアを交えて話してくれる泉さんの存在は、南さんにとってもよかったと感じた。

（ＮＨＫ側）

「えぇトコ」は、関西の視聴者向けに、気楽に行ける、身近ないいところを紹介する番組だ。金曜の夜にくつろいで見ていただくということと、週末に出かけてみたくなることをねらっている。旅人２人の関係性も楽しんでいただけるようにしていて、今回も仲のよい俳優同士の旅だった。今年度からは金曜の午後３時台に総合テレビで全国放送しているが、これまでどおり、まずは関西の視聴者に満足していただくことを大切に制作している。また、よい時間帯の風景も入れたらどうかという指摘についても、紹介の仕方を工夫し、番組を通して地域の魅力を発信していきたい。

（ＮＨＫ側）

今回はプライベートでも仲のよい泉さんと南さんの旅だったので、２人の関係性がうまく出ていたと思う。委員から指摘を受けた、キャッチコピーはあおり過ぎても伝わらないということや、地図をわかりやすくということ、ターゲット層をどこにしているのかということなどについては、今後の制作に生かしていきたいと思う。

○　３月２９日(金)の「朝ドラ１００作！全部見せますスペシャル～歴代ヒロインがチコちゃんに叱られる！？～」(総合 後 7:30～8:42)と３月３０日(土)の朝ドラ１００作　ファン感謝祭「思い出の名シーンランキング」(総合 前 8:15～8:58)を見た。特に「朝ドラ１００作　ファン感謝祭」がおもしろくて、関根勤さんが「おしん」の話

をしていて見たいと思っていたら、ＢＳプレミアムで再放送をしていた。「おしん」は、私の中で今いちばんのトレンドになっていて、制作した当時の時代背景の話を思い出しながらドラマを見ている。今では考えられないような番組構成は興味深く感じる。今の朝ドラは、どちらかというと話題性や、ＳＮＳやホームページのコンテンツの作り方が、見る動機付けになっていると思う。私自身、「あまちゃん」までは朝ドラをあまり見ていなかったが、番組の関連コンテンツがおもしろかったのでそれ以来見るようになった。滋賀県は連続テレビ小説「スカーレット」や、大河ドラマ「麒麟がくる」の放送に向けて、観光ＰＲをしていこうと盛り上がっているが、ＮＨＫには今後も番組に限らず、いろいろなコンテンツ発信も期待している。

○　４月にリニューアルした「ニュース６３０　京いちにち」は、最初と最後に気象情報が入る構成となっており、かなり斬新だと感じている。「ニュース６３０　京いちにち」のタイトルの後、新しい気象予報士の矢澤剛さんが今日の天気について話すので、地元感が伝わってくるし、京都のニュースの時間であることがわかりやすくていいと思う。セットも、木のぬくもりが伝わってくるような、すっきりしたデザインで、今の京都らしいデザインだと思う。新キャスターの江原啓一郎アナウンサーは爽やかな印象で、応援したいと思う。４月２日(火)に、新元号の「令和」を手話ではどう表すかを伝えるニュースがあったが、新しい知識が得られておもしろかった。

○　４月１日（月）から始まった連続テレビ小説「なつぞら」を楽しく見ているが、ヒロインの幼少期を演じる粟野咲莉さんがとても上手だ。私の周囲では「ＮＨＫは子役を探すのが天才的だ」と評判になっている。

○　４月１６日(火)の「ニュースきょう一日」で、ノートルダム大聖堂の火災後、再建に向けた支援の輪を伝えていた。フランスを代表する企業グループが 250 億円あまりを支援することを紹介した後、同様に世界遺産を有する日本の町が募金活動を始めることを、ＮＨＫが迅速に伝えていたことに感心した。

○　３月２３日(土)の「スローな武士にしてくれ～京都撮影所ラプソディー～」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:59)は、実に楽しかった。ＮＨＫの最新機材・撮影技術、何より映像屋魂をドラマ仕立てで見せてくれたところが痛快だった。映像がかっこよかったし、やりつくしたと思われがちな世界は、いくらでも広がるのだという可能性を感じた。

○　昨年９月に放送された「植物に学ぶ生存戦略　話す人・山田孝之」(2018 年 9 月 27 日(木) Ｅﾃﾚ 後 11:00～11:30)の第２弾を放送するということで、大胆な放送を楽し

みにしている。

○　放送番組審議会委員の役目を担うことで再認識しているのがＮＨＫの高度な番組制作能力と番組の幅の広さだ。価値ある情報に触れぬままになっている人たちは多いと思う。多忙を極める現代人はさまざまなデバイスから押し寄せてくる情報の洪水に翻弄されており、情報の生産と消費が結びついていないと思う。ＮＨＫでもネットで過去の番組がオンデマンド方式で視聴できるようになっているが、今後はこのようなプル型の情報探索で視聴者と番組がつながる形が主流になると思う。今後、５Ｇになれば動画ニーズもますます高まっていくと思うので、若い人たちのテレビ離れも食い止められると思うし、時間に追われている人間がＮＨＫのコンテンツに触れる機会が増えることになると思う。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局